

大学共同利用機関法人

人間文化

—にんげんぶんか—

vol.26

2016

シーボルトが 紹介した 日本文化

人間文化研究機構第27回公開講演会・シンポジウム
没後150年

主催者挨拶 立本 成文 (人間文化研究機構長)

企画趣旨 日高 薫 (国立歴史民俗博物館教授)

基調講演 「シーボルト父子の日本コレクションと
ヨーロッパにおける日本研究」
ヨーゼフ・クライナー
(ボン大学名誉教授・法政大学国際日本学研究所客員所員)

講演 「ジャポニズムの先駆けとなったシーボルトの植物」
大場 秀章 (東京大学名誉教授)

講演 「近世日本を語った異国人たち：シーボルトの位置」
松井 洋子 (東京大学史料編纂所教授)

パネルディスカッション「シーボルト研究の現状とこれから」
パネリスト：ヨーゼフ・クライナー × 大場 秀章 × 松井 洋子 × 日高 薫
司 会：大久保 純一

閉会挨拶 久留島 浩 (国立歴史民俗博物館長)

総司会：佐藤 洋一郎 (人間文化研究機構理事)



vol.26

人間文化研究機構第27回公開講演会・シンポジウム

没後150年 シーボルトが紹介した日本文化

日 時：2016年1月30日（土）13:00～17:30
場 所：ヤクルトホール

主 催：人間文化研究機構
担当機関：国立歴史民俗博物館
後 援：文部科学省

目 次

主催者挨拶 立本 成文	3
企画趣旨 日高 薫	4
基調講演 「シーボルト父子の日本コレクションとヨーロッパにおける日本研究」 ヨーゼフ・クライナー	9
講 演 「ジャポニズムの先駆けとなったシーボルトの植物」 大場 秀章	22
講 演 「近世日本を語った異国人たち：シーボルトの位置」 松井 洋子	37
パネルディスカッション 「シーボルト研究の現状とこれから」 パネリスト：ヨーゼフ・クライナー × 大場 秀章 × 松井 洋子 × 日高 薫 司 会：大久保 純一	49
閉会挨拶 久留島 浩	57
総合司会 佐藤 洋一郎	

主催者挨拶

人間文化研究機構長 立本 成文

(司会) 本日はお足元の悪い中、遠くから足をお運びいただき誠にありがとうございます。これより、人間文化研究機構、第27回、公開講演会シンポジウム、「没後150年 シーボルトが紹介した日本」を開催します。初めに、人間文化研究機構、立本成文機構長より皆さまにご挨拶を申し上げます。

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介にあずかりました人間文化研究機構の機構長をしております立本でございます。開会に先立ち、一言だけご挨拶申し上げます。

本日は、土曜日の午後、しかも足元の悪い中、かくも大勢の皆さま方に私どもの講演会にご来会いただきまして、誠にありがとうございます。感謝申し上げます。

主催者の人間文化研究機構（人文機構）は、人間がつくった風土や物、社会、文化を総合的に研究している博物館や研究所が集まっています。六つの研究所は、はなはだ聞き慣れない言葉ですが、正式には大学共同利用機関と呼んでいます。これは、大学では非常に難しい大規模な資料の収集や、学際的と申しますのは、学問分野を超えた最先端の共同研究を行っています。六つの機関はそれぞれ、日本語、日本文学、日本歴史、日本文化、世界の民族、地球環境などの研究をミッションとしています。人文機構では、各機関のミッションを常に見直しつつ、国内外の多様な研究機関と連携しながら、新しい学問領域を創設するために、いろいろ事業を進めております。

その事業の一つとして、日本国外に散在している日本関連資料の調査研究があり、これを私どもは日本関係在外資料調査研究事業と呼んでいます。例えばパティカン図書館に所蔵されています、もともと大分の白

杵藩にあった近世キリストン文書の調査研究、

北米日系社会の移民資料を活用した言語生活史の研究、オランダにあるハーグ国立文書館所蔵の平戸オランダ商館文書の調査研究などがあります。これらと並んで、ヨーロッパにおける19世紀日本関連資料の調査と活用事業は、当機構の国立歴史民俗博物館（歴博）が中心になって、日本文化の発信に向けた国際連携のモデル構築を目指しているところです。

本日のシンポジウムは、この歴博中心の調査事業で得られた成果、特にシーボルトがヨーロッパに持ち帰った膨大な資料をめぐって、「没後150年 シーボルトが紹介した日本文化」というテーマで行われます。人文機構では、日本の風土や文化だけを研究しているわけではありません。世界の文化に目を向けています。特に、世界の諸文化の中で日本文化がどのように見られ、扱われてきたかというテーマは、六つの研究機関が共通に持っているテーマでもあります。

このシンポジウムでは、シーボルトという人の業績が、多岐にわたってヨーロッパに多大な影響を与えたことの紹介を中心に進められると思いますが、主催者としては、このシンポジウムが、異文化としての日本文化が19世紀西洋社会にどのように受け止められ、その後のヨーロッパの日本観にどんな影響を与えたかについて、少しでも理解を深めていただくよすがとなることができれば幸いと存じております。

土曜日の午後、これから短い時間ではありますが、ごゆっくりとお楽しみいただきたいと思います。簡単ですが、これをもちまして、主催者としての歓迎の挨拶に代えさせていただきます。どうもありがとうございました。



企画趣旨

国立歴史民俗博物館教授 日高 薫

(司会) 続きまして、国立歴史民俗博物館研究部の日高薫教授から、この企画の趣旨の説明がございます。

ただ今ご紹介にあずかりました日高です。今、機構長よりご紹介のあった人間文化研究機構の下、国立歴史民俗博物館を中心に行っているプロジェクトの責任者として、今回のシンポジウムの趣旨説明をさせていただきます。

1. 国立歴史民俗博物館を中心としたシーボルトに関する調査研究

今から約150年前の1866年10月18日、ドイツ人の医師であるフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト (Philipp Franz von Siebold) は、ミュンヘンの地で70歳の生涯を閉じました。没後150年に当たる今年、シーボルトイヤーを記念して、各地でシーボルトに関連する催しや書籍の出版などが計画されていると聞いています。

人間文化研究機構では、日本関連在外資料の調査研究の一環として、シーボルトに関わる調査研究事業を、国立歴史民俗博物館を中心とする研究組織によって推進してきました。本日のシンポジウムでは、人間文化研究機構によるこの調査研究の概要をご紹介するとともに、シーボルト研究に携わってこられた3名の研究者をお招きして、各分野の視点からシーボルトの功績を振り返り、歴史の中に位置付ける機会としたいと考えています。

「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代、19世紀に日本で収集された資料についての基本的調査研究」という長いタイトルの付いたこのプロジェ

クトは、現在、歴博の館長を務める久留島教授を研究代表者として、2010年から6カ年計画で始められ、この3月で一区切りを付けることになりました。タイトルから分かるように、本研究の調査対象は19世紀の日本で収集され、海外に渡った日本資料です。ご存じのように、19世紀の日本は、江戸時代から明治時代にかけて、政治や社会、文化の面で大きな変化が起こった時期に当たります。そして、西洋人たちによる体系だった日本コレクションが形成され始めた時期にも当たるわけです。

外国人たちによって持ち帰られた物品の中には、当時の日本人にとって必ずしも大切とは思われなかったものも含まれていました。ですから、現在の日本には残されていない資料を豊富に見いだすことができます。また、収集された時期や経緯がほぼ明確であるため、時代の規準となる貴重な歴史資料であるにもかかわらず、その存在や価値が目立たないままに、収蔵庫の中に眠っている例が少なくありません。私たちはこれらの資料に光を当てることによって、日本国内の歴史研究に役立てるとともに、現地での研究や展示、日本理解に役立てていただき、日本研究や日本文化紹介を活性化できないかと考えました。

ヨーロッパを中心に各地に伝わる19世紀のコレクションは少なくありませんが、私たちはこの中からあえてシーボルトのコレクションを選びました。シーボルトは日本では有名であり、彼の日本研究における功績やコレクションについては、多くの研究の蓄積があります。また、シーボルトをテーマにした書籍の出版や展覧会の開催も、既に盛んに行われています。

しかし、それにもかかわらず、シーボルト関係の

資料が、この分野に新たに興味を持って研究を始めようと思う研究者にとって利用しやすい状況かという、そうでもありません。シーボルト関係資料は彼が収集した日本の民俗資料、美術品、書籍などから、植物や動物の標本、彼自身や弟子たちの手による文献資料、スケッチなど多岐にわたっており、それらはオランダやドイツ、イギリスなど、複数の所蔵者の下に分散しています。これらの膨大な資料の一部は、精力的な調査研究を行った先学の成果として公表されていますが、十分な調査が行き届いていない資料、あるいは、存在は確認されていても一般にはあまり紹介されていない資料が多く残されているわけです。

この状況は、19世紀の他の大規模コレクションの場合はさらに深刻です。さまざまな組織による近年の在外資料調査プロジェクトは一定の成果を上げていますが、その対象は一部の美術資料や個々の研究者の特定の関心に基づくものなど、限定的となりがちです。コレクション全体を時代の規準資料として活用し得る悉皆調査、全てを調査する例はほとんどありません。また、調査成果の多くはその一部が公開されるのみであり、関連分野の研究者間で共有されることが少ないために、異なるグループによる重複調査が所蔵機関の担当者の負担を増大させています。そのようなことが研究の進展を妨げる要因ともなっているわけです。

そこで私たちは、質・量ともに優れ、全体像がある程度把握されているシーボルトコレクションに注目し、可能な限り総合的に調査研究を行い、それらの詳細のデータやデジタル画像を公開したり、既存のデータベースなどの情報を統合することによって、これまでの調査研究の成果を補うとともに、資料情報の共有化のシステムづくりのモデルケースとしたいと考えました。

このプロジェクトは、八つのチームを作り、総勢50名以上の研究者が参加して進められました。その対象は19世紀前半のものとして、オランダのライデ

ン民族学博物館が所蔵するシーボルトコレクション。これは、1度目の来日時のコレクションです。加えて、シーボルトコレクションと密接な関係のある商館長、ヤン・コック・ブロンホフ（Jan Cock Blomhoff）やオーフェルメール・フィッセル（Overmeer Fisscher）のコレクション。19世紀半ばのものとしては、ミュンヘン五大陸博物館が所蔵するシーボルトの2度目の来日のときに集められたコレクションなどを中心としました。さらに、ミュンヘンのコレクションとの比較をする意味で、アメリカのモースコレクション、シーボルトのコレクションの形成の背景を知るために、シーボルトの2人の息子たちに関する資料を併せて調査することとしました。

また、これらの物資料を中心としたコレクションの成立背景を知ることのできる、シーボルトと息子たちの残した書簡、記録、草稿、これらはシーボルトの末裔であるブランデンシュタイン・ツェッペリン家やドイツのルール大学ボーフム、あるいはベルリン中央図書館に所蔵されていますが、これら文献資料の調査も積極的に行いました。

2. ミュンヘン五大陸博物館所蔵のシーボルトコレクション

中でも最も労力を注いで取り組んできたのが、シーボルトのコレクションとして重要な位置を占めながらも従来は詳細な調査がほとんどなされてこなかった、ミュンヘン民族学博物館が所蔵する、2度目の来日時のコレクションです。現在はミュンヘン五大陸博物館という名称ですが、以前はミュンヘン民族学博物館という名前でした。

ヴェルツブルク生まれのシーボルトが、長崎出島の医師として最初に日本に滞在したのが、1823年から1829年にかけての時期です。これが第1次の来日です。一方、シーボルトの2度目の来日は、1859年から1862年の期間です。シーボルトコレクションといっても、大きくこの2回にわたるコレクションがあります。

これら2回の日本滞在の折に収集された日本関係資料は、現在、ライデン国立民族学博物館、そしてミュンヘン国立民族学博物館と呼ばれていた現在のミュンヘン五大陸博物館、それと、シーボルトの末裔のブランデンシュタイン・ツェッペリン家に収蔵されています。オランダ、ライデンのものが1回目のコレクション、ミュンヘンのものが2回目のコレクション、そして、ブランデンシュタイン家には両方のコレクションが若干残されているという状況です。

これまで、シーボルトコレクションといえば、1度目の来日時のオランダのコレクションが有名で、特に日本のシーボルト関連の展覧会においては、このライデンのコレクションばかりが何度も繰り返して展示されるという状況が続いていました。私が把握している限りでは、日本において2度目のミュンヘンのコレクションが注目されたのは1996年、今、図録の写真をお見せしていますが、国立民族学博物館や、東京都江戸東京博物館で開催された「シーボルト父子のみた日本 生誕200年記念」にミュンヘンの一

部の資料が展示されたのが初めてのものと記憶しております。

ただし、この展覧会は、シーボルト親子が集めたコレクション全体を通じて19世紀の日本の民俗などを紹介する趣旨であったために、ミュンヘンのコレクション自体の性格についてはあまり詳しく紹介されていません。

歴博では、このほとんど未紹介であるミュンヘンのコレクションを全て調査し、一般に利用できるように公開することを目標として、過去6年間、10回以上にわたる調査を推進してきました。その結果、6000点を超える多種多様な資料の調査を昨年度末に完了して、現在、全点に画像の付いたデータベースの製作を進行中です。このデータベースは学術協力協定を締結しているミュンヘン五大陸博物館の許可の下、今年3月末までに歴博のホームページ上で一般に広く公開する予定になっています。多くの研究が蓄積されてきたこの分野の研究に、このデータベースが大きく寄与することになると思われます。

ミュンヘンのコレクションには、漆器、麦藁細工、陶磁器、金工などの工芸品が含まれます。漆器は大変数が多いのです。麦藁細工もシーボルトが好んで収集したものです。陶磁器、金工品、あるいは染織品、お面や武具、その他日用品、仏教彫刻、絵画、地図、書籍、アイヌ関係資料、古銭（古いコイン）、自然物など、さまざまな分野の資料が含まれています。ミュンヘン五大陸博物館の信頼関係の下、国内外さまざまな機関からの専門家が調査に赴いて、調査を進めて参りました。

さらに歴博では、このプロジェクトの成果に基づく企画展示「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」を開催する準備を現在進めています。この展示は、シーボルト没後150年の今年から来年にかけて、歴博を皮切りに国内5会場を巡回する予定です。

既に説明しましたように、19世紀に2度にわたって来日したシーボルトは、江戸時代の日本に近代的

な医学を伝える一方で、日本の自然や生活文化に関わる膨大な資料を収集してヨーロッパに持ち帰りました。これは、シーボルトの日本研究が、帰国後に出版された『日本 (Nippon)』『日本植物誌 (Flora Japonica)』『日本動物誌 (FAUNA JAPONICA)』に結実し、後世の日本学、植物学、動物学などに大きく貢献したことはよく知られるところです。しかし、シーボルトが自身の収集したコレクションを基に、日本をテーマとした博物館展示を行っていたことについては、これまでほとんど紹介されていません。

現在準備中の展示においては、歴博のプロジェクトで詳細な全点調査を行ったミュンヘン五大陸博物館所蔵のコレクション他を本格的に紹介するとともに、シーボルトがヨーロッパで実際に行った日本展示に焦点を当てます。ヨーロッパに戻ってからのシーボルトは、日本を紹介するために精力的に行動しています。日本をはじめとする出版物の刊行の他に彼が熱心だったのが、実は日本展示だったわけです。

帰国後、1832年からは、まず、ライデンのシーボルトの自宅、現在シーボルトハウスがある場所ですが、そこをシーボルト博物館と名付けて、コレクションを展示しました。これがその後に、ライデン国立民族学博物館のコレクションになるわけです。

その後、1859年に2度目の来日を果たしたシーボルトは、日本展示をさらに充実させるために、積極的な収集を行います。そして、その収集物を持ち帰った1863年、アムステルダムの産業振興会において再び展覧会を開催しています。画面でご覧いただいているのは、アムステルダム産業宮のシーボルトの展示の中の、日本の宗教に関わるコーナーの展示のイラストです。

このアムステルダムにおける展覧会の展示品の中には、1度目の来日時のコレクションと、2度目に足したコレクション、つまり現在のライデンにあるものと、ミュンヘンにあるものが混在していたと考えられます。シーボルトが帰国直後に新しく購入した

コレクションを1度目のコレクションに加えて展示を構成したということは、この展示の展示品リスト、あるいはミュンヘンの所蔵品との対照によってほぼ確実に確認することが判明しました。

さらに、1864年には、生まれ故郷のヴェルツブルクのマックス職業学校にこの展示を移設して、展示をしています。そして、1866年3月、バイエルン王国の文科省からミュンヘンの王宮公園に面した宮殿内の北部ギャラリーホールの使用許可が下りて、シーボルトの生涯最後の日本展示がオープンしました。このときの展示構成を示すリストが、幸いミュンヘンに残されており、ミュンヘンの日本展示の実際を知ることができます。これはシーボルトの息子のアレクサンダー (Alexander) がコレクションをバイエルン国王に売却するときのリストですが、シーボルトがミュンヘンで行った展示構成順に並んでいます。今回のプロジェクトにおいて私たちは、このリストを基にシーボルトの最後の日本展示の実際の様子を復元的に再現したいと考えています。

このように、日本に戻ったシーボルトが、近代的な博物館あるいは民俗学が生まれてきた黎明期に、日本を紹介するための展覧会を行いつつ、2度目の来日を活用してそのコレクションを完成させ、彼の博物館構想を完成させていった経緯を展示で明らかにしたいと思います。このことは同時に、今まで1度目の来日時のコレクションより軽く見られがちであったミュンヘンのコレクションを再評価することにもつながると考えています。

3. 今後の研究の展開について

さて、冒頭に述べましたように、歴博が推進してきたプロジェクトの目的は、19世紀という時代の規準となる大規模コレクションの調査を行うとともに、その成果としての調査研究情報の共有化のためのモデル構築をすることでした。プロジェクトにおいては、今まで本格的な調査が行われてこなかったミュンヘンのコレクションを全点画像付きのデータベースとして一般公開し、またそれらを展示を通じて活用するという初期の目的を達成することがほぼできることとなります。これは、大規模コレクションの調査のあるべき姿と言えるかと思います。

また、複数の所蔵機関に分散する文献資料の調査・撮影と、データ整理も順調に進行して、一部をデータベースとして公開する予定です。ただし、この文献資料には個人所蔵の資料もたくさん含まれているために、画像を含めた一般公開までには至りませんでした。しかし、シーボルトコレクション国際会議などを通じた所蔵者間、あるいは研究者間の交流の結果、研究資源の共有化が必要だという動きが確実に活発化していたことは評価できます。その結果として、画像は難しいのですが、今のところ画像を付さない文字データのみデータベースの一般公開は個人の方もご許可くださいます。画像付きのデータベースについては、研究者対象で公開が可能ということになりました。一口に共有化と申しまして、それぞれ背景となる事情があり、簡単に達成できるということではありません。しかし、今回のプロジェクトによる成果が、今後の所蔵者間の連携、情報の共有化への足掛かりとなることを希望しています。

5年余りの調査研究活動の中で実感したのは、シーボルト関係資料の幅広さ、そしてその圧倒的な量です。5年間の調査では、その一部しかカバーすることができませんでした。人間文化研究機構では、今後の調査研究の継続によって多大な成果が想定されること

から、来年度、今度の4月からの6年間も、同様の調査を継続することが決定しています。次の事業においては、ウィーンの世界博物館が所有する、シーボルトの次男、外交官で考古学者でもあったハインリヒ・フォン・シーボルト（Heinrich von Siebold）が日本に来て集めたコレクションの調査を行う予定になっています。そして、今まで行ってきたシーボルト父子関係の文献資料の継続調査などを進める予定です。

さらには、同時代の日本関連物資料の調査研究、そして、それぞれの調査先の事情や対象としたコレクションの性格に応じた多様な対応によって、海外における日本展示を支援する事業、現地スタッフ自身による資料調査や展示などを可能とするための人材育成などに協力して、国際的な調査研究協力の新しいモデル構築に努めたいと考えています。

趣旨説明が長くなりましたが、本日の国際シンポジウムがこれまでのシーボルト研究と未来のシーボルト研究をつなぎ、また、シーボルトに関する多くの方々の理解を深めてくれることを願って、私の説明を終わりたいと思います。ありがとうございました。

基調講演

「シーボルト父子の日本コレクションと ヨーロッパにおける日本研究」

ボン大学名誉教授・法政大学国際日本学研究所客員所員
ヨーゼフ・クライナー氏

本日は不順なお天気にもかかわらず、こんなに大勢ご来場くださいましたことを、私からも心から御礼申し上げます。本当にありがとうございます。また、この講演会にお招きいただいたことを大変光栄に思います。関係の方々、人間文化研究機構、特に、歴史民俗博物館の久留島浩館長、日高薫先生のご臨席に心から感謝を申し上げます。

1. 西洋における日本学・日本研究の歴史

1. 西洋における日本学・日本研究の歴史
2. 日本工芸美術ならびに民俗の収集の歴史
3. シーボルト父子のコレクションとその意義

私に課せられましたテーマは、非常に広くて奥深いテーマで、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト、日本では大シーボルトとも呼ばれていますが、彼とその息子2人の日本関係のコレクションが、西洋（ヨーロッパ）における日本研究に及ぼした影響・貢献というテーマを三つの章に分けて、それぞれの要点をかいつまんでご説明申し上げたいと思っております。

三つの章の一つ目は西洋における日本学、英語で Japanology、ドイツ語で Japanologie という学問の歴史。二つ目は日本工芸美術、または生活用具、民俗の収集の歴史。三つ目に、この二つの結びとして、シーボルト父子のコレクションの意義についてお話ししたいと思います。



I. 日本学・日本研究の歴史

日本学 Japanology, Japonologie
文献学 Philology, Philologieの一つとして19世紀半ば頃設立
対象は日本=日本文化 - 日本文化研究
方法は「認識されたことの再認識」 Erkennen des Erkannten (Boeckh)
すなわち文学の研究中心 (翻訳、注釈、解釈と鑑賞)
研究資料は文献、書物、文字で書いたもの
➡ 図書館、文書館は重要

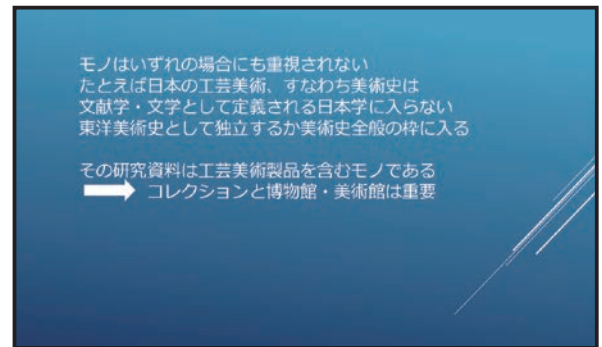
社会科学的日本研究 Japanese Studies 昭和戦前1930年代
地域研究として 第二次大戦中ないし以降～
ビジュアル・ターン Visual turn 1990年代以降～

日本学という言葉は、第二次世界大戦後に日本でも使われるようになりましたが、Japanology、Japonologie は19世紀半ばごろ、当時の近代ヨーロッパの学問体制の中で設立された文献学（フィロロジ）の一つとして生まれました。文献学とは、ドイツのアウグスト・ベック（August Boeckh）というベルリン大学の教授の定義によれば、「Erkennen des Erkannten（認識されたことの再認識）」すなわち、ある民族文化の全てはその民族の文学に表れているので、その文学を翻訳し、注釈を加え、解釈すると、その文化の全てを理解できるという考え方です。これはもちろん、古代ローマやギリシャなど、今やもう出会うことのできない過去の民族の文化の研究の在り方なのです。すなわち、ラテン語で書かれた文学を解釈すると、古代ローマのことを全て理解できるという考えでした。もちろん、その場合の研究資料は文献、文字で書いた書物です。ですから、図書館、

文書館は重要な意義を持っています。

ところが、20世紀に入って、1930年代、昭和の初めごろから、日本に行けば実際に生きている日本人と出会うことができ、話をすることができるという認識を持ち始めます。あるいは、統計学を使って日本人がどう考えているのか、何が好きで、何が嫌いであるのか調べることができます。そこで、日本文学研究だけでは物足りなくなり、生きている今の日本を対象とする社会科学的なアプローチを取った日本研究が始まったのです。そういうアプローチは、JapanologyではなくJapanese Studies という英語名を使うことになりました。ドイツ語では長い間、それに当たる言葉がなかったのですが、昭和64年（1988年）にドイツ連邦政府が、現代日本を研究対象とする国立研究所を設立したのです。その際に連邦政府はドイツ語の名称をだいたい考え、Japanese Studies をドイツ語訳して Japanstudien とし、Deutsches Institut für Japanstudien を東京に設立しました。ですから、イギリス、アメリカの方にそういうアプローチが先にあり、後からだんだんヨーロッパ大陸でもそういう見方が広がってきたのです。

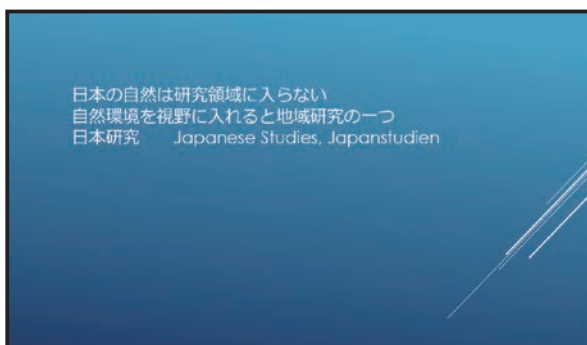
最後に、1990年代に入ってから、もう一つの日本研究の転換が起こったのですが、英語でビジュアル・ターン（Visual Turn）と呼ばれています。これは、文字で書いたもの、書物だけではなくて、あるいは社会科学的な方法で集められた資料だけでなく、モノが中心になっています。もちろんモノには美術工芸品も含まれています。



長い間、日本の美術史の研究は、ヨーロッパでもアメリカでもそうなのですが、日本研究の枠内に入っていなかったのです。これはむしろ、広い意味の美術史の一つの分野として、あるいは、全く独立した東洋美術史、日本美術史として発展してきたのですが、ようやく最近になって幾つかの大学では、日本研究の中に日本美術の研究も含まれるようになりました。

私は最近、二つの例を見てきましたが、ヴィーン大学では、東洋美術史、日本美術は一般の美術史研究所に含まれています。ですから、日本研究を専攻している学生は、日本美術の講義を一つも聴く必要はないのです。ところが、それに対してボン大学では、だいたい四苦八苦したのですが、最後にはやはり日本美術史、東洋美術史は東洋文化研究所の枠に入って、日本研究を専攻する学生は日本美術史の講義も必修というカリキュラムになっています。

ですから、一言で言うと、日本学（Japanology）は一筋の流れではなく、幾つかのブレイクがあって、幾つかの転換期を経て、最初は文献学的な文学研究、次に社会科学的なアプローチを取る見方があって、そして最近のビジュアル・ターンに至ったということです。後でまたお話ししますが、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの日本研究はむしろ、最近のビジュアル・ターンを150年前にすでに実現していた見方であったのではないかと私は思っています。



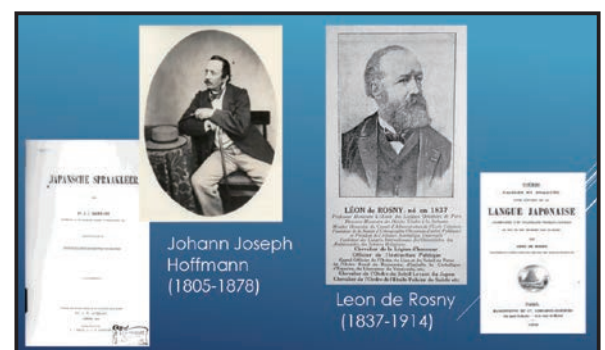


今までに申し上げたことをもう少し深く説明します。文学的な日本学は1850年代、19世紀半ばごろから、ウィーンで始まりました。その出発点になる資料は、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトがその第1回目の日本滞在中に収集した日本の書物のうち、約60冊を彼が1830年代にウィーン帝室図書館に寄贈したものです。もちろん当時は誰もそれを読むことができなかったので、ただ本棚に入れておいたと思いますが、1840年代に入ると、プラハ大学医学部を卒業した医師、アウグスト・プフィッツマイヤー（August Pfizmaier）がウィーンに現れます。この人は言葉の天才で、既にプラハ大学時代にロシア語、トルコ語、ペルシャ語を身に付けており、ウィーンに来たときにシーボルトの残した60冊の日本の書物と出会い、独学で日本語を勉強して、その1冊の翻訳に取り掛かったのです。

プフィッツマイヤーがなぜ柳亭種彦の『浮世形六枚屏風』という、今は日本でも誰も知らない戯作小説を選んだのかは分かりませんが、ひょっとしたら、それほど分厚くて難しいものではなかったからではないかと思います。いずれにしても、1847年、柳亭種彦が亡くなった2年後にドイツ語で出版し、さらに日本の原本もウィーン大蔵省印刷局でそのために始めて草書の活字を作り印刷し、合本にして出版したのです。それが初めて外国語に翻訳された日本文学作品でした。あるドイツの文学雑誌の書評は、「日本の文学がこんなレベルであるのならば、それ以上知る必要はないであろう」という厳しい批判をしたのですが、それにも

かわからず、ベストセラーになりました。そして、ドイツ語訳から英語訳、フランス語訳、イタリア語訳もできましたし、第二次世界大戦、ドイツ陸軍が同盟国日本を理解するために『浮世形六枚屏風』のドイツ語訳を再版して、兵士に配っていたのです。

プフィッツマイヤーは独学で日本語を身に付けたので、和独辞典も手掛けました。それが1851年に出版された和独辞書『Wörterbuch der japanischen Sprache』です。先日たまたま神田の古本屋でこれを見たのですが、宣伝文には大きく「プフィッツマイヤーの世界で初めての和独辞典」と書いてありました。ただし、「イ」までです。「イ」はローマ字のアルファベットなら、完成度三分の一強と言ったところでしょうか。値段はそれに相当するくらいでした。ところが本物を見ると、何と、「いろは」の「イ」でした。ですから、薄っぺらのものです。でも大変な苦勞だったと思います。プフィッツマイヤーはそれを基にして、明治12年に亡くなるまで、『万葉集』や『古事記』の一部を含む、日本の80ぐらいの文学作品の翻訳を成し遂げています。本当に日本学の事初めと言ってもいいのですが、そのバックグラウンドにフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの日本の文献のコレクションがあるのです。



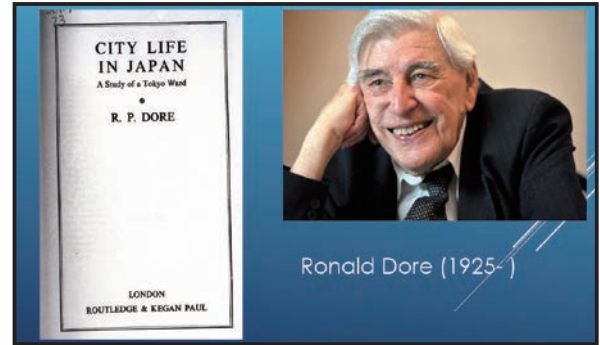
オランダでは大シーボルトの直弟子でヨハン・ヨーゼフ・ホフマン（Johann Joseph Hoffmann）という人が、同じように日本文学の研究を進めていました。当然のことながら、まず日本語を身に付けて、『Japansche Spraakleer』という日本語文法書を1867

年にライデンで出版しています。慶応年代ですね。そして、フランスではパリで活躍したレオン・デ・ロニー（Léon de Rosny）が『Langue Japonaise』という日本語の教科書を1856年、ホフマンよりもさらに10年前に出版していたのです。この3人はヨーロッパで文献学的アプローチを取った Japanologie の先学者で、その中でホフマンは成功して、世界で初めてライデン大学で日本学の講座を開くことができ、世界で初めての日本研究の教授に任命されたのです。



1930年代に入ると、社会科学的なアプローチを取る日本研究が少しずつ広まってきます。一番古いものは『A Japanese Village: Suye Mura』（ある日本の村：須恵村）です。須恵村は熊本の人吉の近くの小さな村ですが、ジョン・エンブリー（John Embree）というアメリカのシカゴ大学の文化人類学者が1年間この村に入り、調査研究したのです。文学ではなく、村に入って1年間村の人と一緒に生活し、その村の生活、しきたり、年中行事、農業のことなどをきめ細かく報告したもので、日本の農村社会学の先駆けにもなる研究です。画面中央は、皆さんよくご存じのルース・ベネディクト（Ruth Benedict）の『菊と刀（The Chrysanthemum and the Sword）』です。『菊と刀』は日本の民族文化の基本的な研究書で、ルース・ベネディクトが戦時中、主に日系アメリカ人2世、3世の方々を相手にして社会科学的な方法で調べた本です。その両方の伝統を受け継いで、戦後、昭和20年代から30年代にかけて、ミシガン大学が岡山県で研究所を開き、10年間にわたって岡山県の農村や池

田藩の歴史を調べて報告しました。その一つの成果が『Village Japan』（日本の農村）という、今や日本学の古典となっている書物です。



ここで、私が大変尊敬しているロンドン大学のロナルド・ドーア（Ronald Dore）先生のことを、今日は紹介させていただきたいのです。ドーア先生は、文学の面から日本学を研究しはじめ、昭和25年、戦後間もなくイギリス政府から日本に留学に出されました。彼の研究テーマは江戸時代の寺子屋教育でしたが、日本に来る船旅の間に、留学の1～2年間を通じて国会図書館に入って本ばかりを相手にするのはあまりにもつまらないと考え、それを取りやめて新宿の一つの小さな隣組を取り上げて、そこに住み着いて『City Life in Japan（都市の日本人）』を書きました。これは日本の都市社会学の出発点になりました。最初はアメリカのエンブリー、ベネディクト、ミシガン大学、次はイギリス、ドーア先生と、少しずつ生きている日本を相手にしてテーマにして取り上げる日本研究に変わっていくのです。



1990年代からは、日本研究だけでなく中国研究や

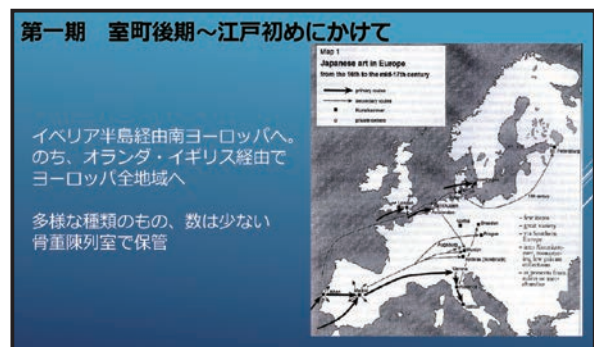
インド研究にもそのような動きを認めることができます。ビジュアル・ターン、すなわち文学や社会科学の資料以外に、モノを対象とする日本研究が始まりました。ヴィーン大学のセップ・リンハルト (Sepp Linhart) 教授はヨーロッパでは他に先駆けて、比較的早い時期に、誰でも使える浮世絵の風刺画のデータベースを工芸美術館との協力で完成させました。幕末明治の社会変化を研究する資料として浮世絵を使うというわけです。

日本では、二つだけ紹介しますと、立命館大学のアート・リサーチセンター (ARC) が浮世絵検索閲覧システムを持っています。10年近くヨーロッパ中を調査研究し、そこに保管されている浮世絵を調べてデータベース化したものです。そして、私が今お世話になっている法政大学の国際日本学研究所が、文部科学省から調査研究費を頂いて、ヨーロッパで保管されている日本の仏教美術のデータベースを作成しています。日高先生が先にご説明してくださったとおり、こういったものは、その物を保管している相手の博物館の許可を得ないと発表できないのですが、仏教美術データベースは現時点で70カ所の博物館との交渉に入っていて、そのうち46カ所とは既に契約も成立しています。これは一般公開のデータベース (aterui.i.hosei.ac.jp:8080/index.html) です。誰でも使うことができます。また後でそのデータベースの意味について触れたいと思います。

2. 美術工芸と民俗収集の歴史

II. 美術工芸と民俗収集の歴史

1. 室町末期 16世紀
献上品中心の貿易品の時代
2. 江戸時代初期～文化、文政期に至るまで
オランダ東インド会社の時代
3. 百科全書主義時代
シーボルト父子とモース
4. 明治期の大々的な美術工芸のコレクションの時代
5. 現在 多岐にわたる収集



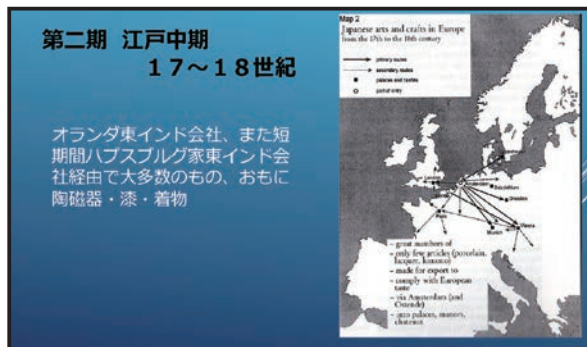
二つ目のテーマに移ります。美術工芸と民俗収集の歴史です。これはヨーロッパと日本との最初の接触が行われた室町末期、桃山時代16世紀後半に遡ります。当時は、コレクションというよりも献上品中心の贈り物交換でした。イベリア半島経由で、例えば九州の少年使節団や伊達政宗の支倉使節団などが、日本の権力者からヨーロッパの法王をはじめとする王家や貴族に美術品を持ち込み、これらは往々にして向こうの宝物館や骨董陳列室に保管されるようになりました。



一つの例を挙げますと、鎧 (よろい) や武器です。画面の左の方は家康公がハプスブルグ家の皇帝ルドルフ2世に贈った「天下」という大きな文字を胸に描いた鎧です。日本の鎧は、他にも秀忠や家光から贈られたものがいくつかヨーロッパに保管されていますが、「天下」という文字が描かれているのはこの一つだけです。恐らく家康は世界の事情をきちんと掴んでいたのではないかと思います。当時スペインは「太陽の沈まぬ国」といわれ、ハプスブルグ皇帝が天下を支配していました。

あるいは真ん中のものは、アイルランドの独立運動の英雄、サー・ニール・オニール（Sir Neill O'Neill）の肖像画です。このサー・ニール・オニールの宝物として、ロンドンのテイト・ギャラリーに展示されている肖像画で、人物の脇に室町時代の胴丸の鎧が置かれています。

さらに、日本とは間接的にしか接触しなかったデンマークにも、日本の鎧があります。デンマーク東インド会社はインドまでしか船を出すことができなかったので、この鎧は恐らくイギリスあるいはオランダから手に入れたもので、江戸初めからデンマークの宝物館に保管されていましたが、現在は、コペンハーゲン国立博物館に保管されています。



次の時代は、江戸時代中期から文化文政に至るまでの、オランダ東インド会社が支配的な地位にあった時代です。この時期には、アムステルダム経由、あるいは、18世紀に入って20年間というごく短期間だけハプスブルグ家がオーストエンデで営んだ東インド会社を通じて入ってきた有田焼、漆、着物の三つがあります。あまり種類は多くありませんが、膨大な数の有田焼が入ってきており、ヨーロッパのどの館や城に行っても、どこかの部屋に必ず有田焼の花生けやきれいな皿が置いてあります。



あまり知られていませんが、ヨーロッパでは、着物は焼き物や漆よりもはるかに高価であったので、大変なもうけになったのです。そこで、オランダは日本の生地をインドに持って行って、インド人の安い労働力で日本の着物を生産してもらったのです。そうして大量生産の日本の着物がヨーロッパに流れてきて、今で言うガウンになりました。右はオランダ国王ウィレム3世（Willem III）の本物の西陣織の着物です。最も豪華なブリュッセルのレースを袖口に付けています。左はケルン選帝侯クレメンス・アウグスト（Clemens August）の「漆の間」ですが、そこに掛けられた肖像画を見ると、選帝侯はインド製の日本式ガウンを羽織り、手にした日本の焼き物で恐らく緑茶を飲んでいるだろうと考えられます。このように、日本の文化はヨーロッパの文化に溶け込んでしまっています。



シーボルトの時代を少し飛び越えて明治に入ると、開国に伴って大量の文化物がヨーロッパやアメリカに流出します。特に仏教関係のものは神仏分離の関係で、多くのお寺が自分の持っていた仏像などを、

生き残るために売らなければならなかったのです。そのため、仏像がヨーロッパに流出しました。もちろん直接日本で集めることもありましたが、場合によってはパリの画廊で求められることもありました。

明治期のコレクション ヨーロッパ

画廊や美術商を通じて

- 起立工芸会社
- 林忠正 1884-1900 Paris
- ジークフリート・ビング Siegfried Bing 1880-1905 Paris
- 山中定次郎 1894 London, NY, Paris
- 小林文吉 1892-1923 Tokyo
- 山田虎次郎 1894-1914 Istanbul


万国博覧会などを通じて

パリ 1867, ヴィーン 1873, パリ 1878, 1900.

日本の皇族・貴族・企業家の贈答品

買い手:

Frederick Silbert (France), Gregorios Manos (Corfu), Justus Brinckmann (Hamburg), Feliks Jasienski (Cracow)



有名な画廊の一つが起立工芸会社です。工芸美術を中心に取り扱う日本の国営の貿易会社で、外貨獲得のために明治政府がつくった会社です。また、写真右下の左側は若い頃の林忠正、右側は関西方面からパリなどに店を出した中山商会設立者の定次郎です。林忠正の良き友人で競争相手だったのはドイツ人のジークフリート・ビング (Siegfried Bing) でした。この二人がパリでそれぞれ画廊を開き、日本の浮世絵をはじめ美術品を販売しました。東京では、小林文吉が上野で博物館の隣に店を開いていました。あまり知られていませんが、茶人の山田虎次郎がイスタンブールで10年間にわたって日本美術の店を開き、多くの日本の美術品がオスマントルコの貴族の手に渡りました。

また、万国博覧会で展示されたものを、持ち帰る費用を節約するために地元で売却することもありました。特に1873年のヴィーン万博は、明治日本が初めて近代国家として参加した世界万国博覧会でした。もちろん、パリ万博にも2回にわたって参加し、林忠正が中心となって活躍しました。

日本の皇族、貴族、企業家が、外国人に贈り物にすることもありました。つい最近、インドのムンバイ市立博物館で黒漆螺鈿の大きな屏風を見たのですが、後ろ側に「タタ君に贈る」とありました。タタ

君とは、現在のタタ・モーターズなどを抱えるインドの大きな財閥を興した人のことで、明治時代に日本の紡績組合がその人に屏風を贈ったのです。それが今、ムンバイの博物館に保管されています。

浮世絵への注目

日本コレクションの全体の中で浮世絵が占めている比率

Victoria and Albert, London	42,159点中 66% (約29,000点)
Cracow (Feliks Jasienski Coll.)	6,000点中 76% (約4,500点)
Pushkin Mus., Moscow (Sergeij Kildav Coll.)	2,800点中100%



Enrico de Barbone Bardi (1889年)

日本で集められた、あるいはヨーロッパ、中でもパリの画廊で購入された日本の美術品の中では、特に浮世絵が注目されます。これは日本でもヨーロッパでも誰でも知っています。当時のヨーロッパの美術、インプレッショニズム (印象派) は日本美術から大きな影響を受けて発展してきたので、浮世絵のコレクションはどの博物館に行っても目に付きます。ここでは三つの例だけをご紹介します。

ロンドンの工芸美術館であるヴィクトリア&アルバート博物館には、ヨーロッパで最も多く、42,159点の日本の美術工芸品が保管されており、その66%が浮世絵です。また、ポーランドはクラクフのマンガ (Manggha) 博物館には、フェリクス・ヤシェンスキ (Feliks Jasienski) のコレクションがあります。ヤシェンスキは企業家で日本に来たことがなく、そのコレクションは全て彼がパリで買い求めたものです。約6000点の日本の美術品工芸品があり、その76%が浮世絵です。「マンガ」というのは設立者であるヤシェンスキが使っていた号で、北斎の『漫画』からフェリクス・マンガ・ヤシェンスキと名乗っていました。ですから、マンガ博物館だから漫画が展示されていると思ったら大間違いで、日本の美術工芸品です。それから、モスクワのプーシキン美術館には、明治末期、ロシアの極東で勤務した海軍士官、セルゲイ・

キタイエフ (Sergheij Kitaev) のコレクションがあり、2800点の100%が浮世絵です。ですから、浮世絵は日本美術の代表的なものになっているのです。先に挙げた立命館大学のプロジェクトは、その浮世絵を網羅的に調べてデータベース化するよう努めているのですが、いつまでも終わらない仕事ではないかと思っています。しかし、非常に重要な仕事の一つです。

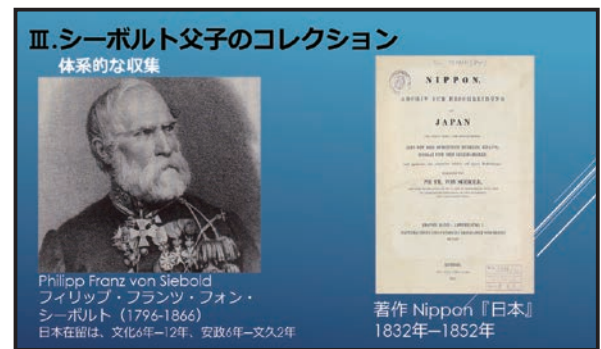
前頁写真の画面左側は、エンリコ・ディ・ボルボネ・バルディ (Enrico di Borbone Bardi) の掛け物です。彼はイタリア系ハプスブルク家の大公で、また、母方を通してフランス王家とも繋がりがあったことから、アンリ・デ・ブルボン・バルディ (Henri de Bourbon Bardi) というフランス語の名前も使っていました。彼は明治30年代に日本に来て、シーボルトの次男の案内で6週間ばかり京都、東京、日光を歩いて、膨大なコレクションを持ち帰り、ベネチアの彼のパラツォに展示したのです。これは現在、イタリアで最も古い国立東洋美術館となっています。彼がいかに日本好きであったかは、この掛け物からよく分かります。当時の日本では、こういう掛け物を先に準備しておいて、買い手が決まったのち、その顔を後から描き加えて売っていました。



日本学のビジュアル・ターンと日本工芸美術コレクションとの一つの見事な結び付きを見せてくれたのが、2015年9月から2016年1月まで、スイスのジュネーブ市立民族学博物館で行われた特別展「Le bouddhisme de Madame Butterfly: Le japonisme bouddhique」(ジャポニズムの時代の仏教美術) です。

実は10年ほど前にドイツで、私も関係して京都・醍醐寺の密教美術の特別展を開いたのですが、博物館の予算だけで5~6億円ぐらい使って実現しました。ただ、今は1カ月の特別展のために5~6億円を使う博物館はありません。それで、ジュネーブ市立民族学博物館は、法政大学のデータベースを利用して、そこに入っている約3800点の日本の仏教美術品の中から、ヨーロッパにあるものを選んで、集めて展示したのです。ジャポニズムの時代には、浮世絵だけでなく仏教美術も大量に集められてヨーロッパに紹介されました。非常に印象的な展示会でした。

3. シーボルト父子のコレクション



前置きが長くなりましたが、ようやくシーボルト父子のコレクションの話に入ります。まず、お父さんのフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトです。この時代は百科全書主義といって、物事を研究するときには、その一つのテーマについてあらゆる情報を網羅的に集め、紹介する時代でした。シーボルトはこれをその日本コレクションで実現したのです。本当に体系的に集めたコレクションを基に『Nippon』という著作を20年にわたって書き続け、出版しました。

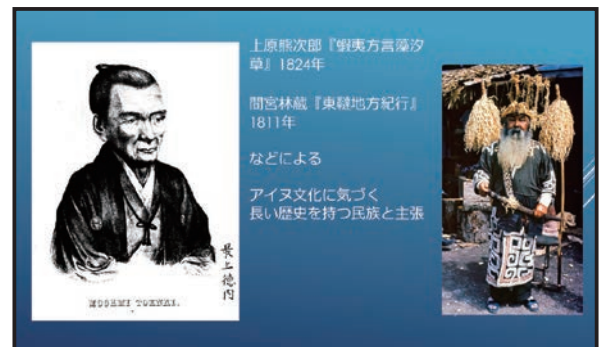


例えば、シーボルトは漆器も体系的に集めていました。左側の写真は、沖縄のシーミー（清明祭）というご先祖祭り（お墓参り）に使う道具です。右上は湯庫（タークー）という茶桶で、中にお茶を入れてお墓参りに持って行くのですが、沖縄の朱漆沈金の道具です。左上は梨地の茶箱、その下は黒漆螺鈿の提重（さげじゅう）、一番下も茶箱です。

実は、これらの沖縄の提重と湯庫はミュンヘンの博物館に収蔵されています。先ほど日高先生が紹介してくださったとおり、ミュンヘンのコレクションは、シーボルトが2回目の日本滞在中に集めたものだといわれていますが、これらの沖縄のものは、1回目の滞在中、長崎で島津重豪と親しく交流したときに手に入れたものだと思います。彼は、親しみを感じたり、特に好きであったものはライデンに残さず自分のものにして、自分の家で楽しんでいたのでしょう。そして亡くなった後、奥さんがそれを2回目のコレクションと一緒に、ミュンヘンのバイエルンの王様に売却したのです。さらに、奥さんは2人の息子のために形見を幾つか残しました。そのため、シーボルトが最初の日本滞在中に集めたものは、次男のハインリヒ・フォン・シーボルトのヴィーンのコレクションにも入っているのです。だから、家族の流れも考えながら分類しなければなりません。

シーボルトの漆器のコレクションには、漆器づくりの道具と材料も含まれます。複数の種類の漆や、小さな木材にブナ、ヒノキ、スギといったことをきちんと書いた木材資料もあり、どういふにこれ

を使ったのか、どういふに漆器を作るのかも著作『Nippon』に書いてあります。



もう一つ、シーボルトのコレクションには大きな意味があります。彼は江戸参府のとき、幕府の北方探検者の何人かと親しく付き合っただけで交流しました。例えば最上徳内です。最上徳内の名前がシーボルトの文献に出てくるときは、必ず「我が友徳内」と言う枕詞が付してあります。江戸を離れると、最上は小田原まで一緒に歩き、その道中でアイヌのことについて話をし、シーボルトはそれをノートに書き留めていました。間宮林蔵などもそういった情報を与えた1人です。そういう北方探検者によって、シーボルトはアイヌ文化に気が付きました。そして、アイヌは長い歴史を持つ民族だという結論を出したのです。

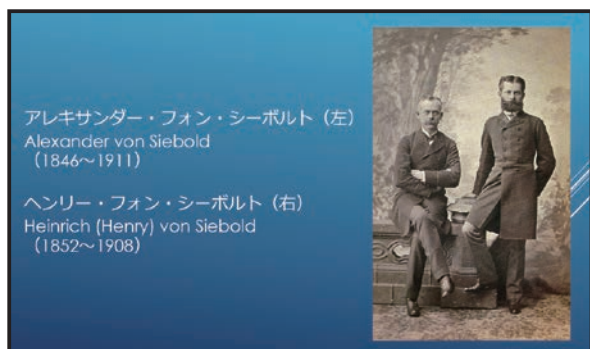


画面の左は、著作『Nippon』に入っているアイヌの道具の図版、右は現在ライデン国立博物館に保管されているシーボルトのアイヌコレクションです。トンコリという楽器、恐らく日本人へのお土産品としてアイヌの人が作った壺、煙草入れ、マキリ（ナ

イブ)。糸巻きはここには入っていませんが、別のページに載っています。とにかくアイヌについても日本と同じように網羅的に、アイヌの生活を理解できるようにモノを集めていたのです。

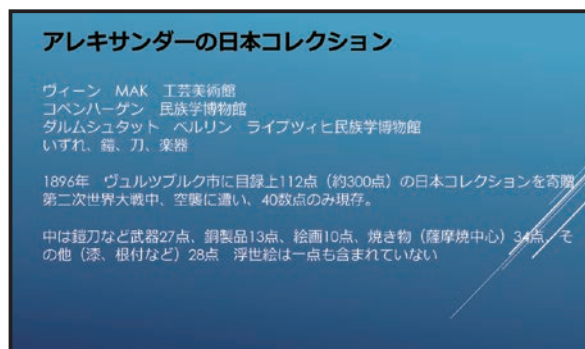


次に、シーボルトが日本の中の異文化として深い興味と関心を持った文化が琉球文化です。もちろん琉球に自ら渡ることはできなかったのですが、島津重豪によっていろいろなものを手に入れて、沖縄の話を書きました。また、森島中良の『琉球談』という、これは中国使節団の琉球報告を日本語にしたものですが、これをシーボルトの弟子・高野長英がオランダ語に訳し、これを基にしてシーボルトがドイツ語訳を作るのです。これが『Nippon』の中に含まれています。上の写真右下は沖縄の漆、中央は中国皇帝に献上した黒漆螺鈿模様のお盆です。



息子2人の話に移ります。長男のアレクサンダーは、日本の外務省のお雇い外国人で、40年にわたって審議官のような立場で、東京、ヨーロッパ、ロンドン、ベルリンで日本の外交を支援することが仕事でした。右に立っているのは次男のヘンリーで、本当はハイ

ンリヒという名前ですが、自らヘンリーという呼び名を好んでいました。アレクサンダーは2回目の父親の日本再訪のときに一緒に江戸に来ていますが、ヘンリーは明治2年に東京に来ました。



アレクサンダーのコレクションはあまり注目されていません。というのは、あちこちに分散されているし、彼はお父さんのように体系的に集める暇がなく、関心も政治や外交など他のところに向いていたからです。彼は日本の近代化に貢献するのですが、物を贈るのはむしろ日本の外交の一つの手段として、外国に日本の伝統的な、特にサムライ、武士文化を紹介するものでした。鎧、刀、楽器、漆など、ウィーンの工芸美術館、コペンハーゲン国立博物館、ダルムシュタット、ベルリン、ライプツィヒ各民族学博物館にあるのを、1896年、父親のフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの生まれたヴュルツブルク市に、300点(目録上は112点)の日本コレクションを寄贈しました。これは残念ながら第二次世界大戦中に空襲に遭って40点しか残っていないのですが、現在、ヴュルツブルクのシーボルト博物館で保管されています。興味があるのは、このコレクションに浮世絵が1枚も入っていなかったことです。やはり、アレクサンダーは武士社会、明治のエリート社会の人で、浮世絵のような民俗的な趣味のものにはあまり興味がなかったようです。



ヘンリーは若くして日本に来て、割と早く日本語を身に付け、通訳や外交官として、オーストリア・ハンガリー帝国の公使館に勤めていました。約30年間東京で活躍したのですが、最初は考古学に興味を持ちました。父親の時代は、まだ考古学という学問がヨーロッパでも確立されていませんでしたが、ヘンリーの時代には、特にコペンハーゲンのイエンス・ウォルソー (Jens Worsaae) という世界的に有名な考古学者が活躍していて、シーボルトは文通によってそのウォルソーから考古学の知識を身に付け、エドワード・モース (Edward Morse) と全く同じ明治10年の秋、大森の貝塚を発掘しました。その後のモースとの論争がよく知られていますが、モースはそのとき、アメリカの大学出身の日本の帝国大学の講師で、39歳。ヘンリー・フォン・シーボルトは独学の考古学者で、25歳です。にもかかわらず、自分の立場も顧みず激しく論戦しました。今から見ると、むしろヘンリー・フォン・シーボルトは現代日本の考古学的見解に近い見解を持っていました。



ヘンリーは何回かにわたって考古学の研究会を開

き、例えば蜷川式胤など、日本の当時の考古学に興味を持った人々と一緒に勉強をしていました。



あまりにも自分の家が狭かったために、松平忠恕の屋敷を借り、畳の上で自分の発掘した物や表面採集した物を開いて、見学会や研究会を行っていました。明治12年、自分の考古学的研究の結論を二冊の本にまとめて出版しました。一冊は英語で書いた『Notes on Japanese archaeology』(日本の考古学についてのノート)で、20枚ほどの写真のページも付いています。日本考古学においては、モースの出版と並んで出発点となったものです。もう一つは日本語で書いた『考古説略』です。裏付けには明治12年、「奥国ヘンリー・フォン・シーボルト著」とあります。これは日本で初めて「考古」という言葉を使った出版物でした。

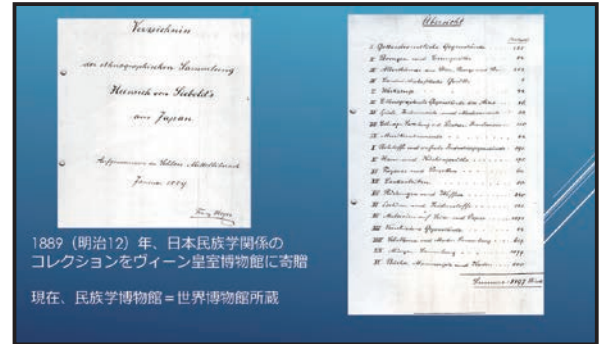


ヘンリーは、大森貝塚の遺跡を残した民族はアイヌであったという結論を出しました。これはモースとは正反対でした。モースはアイヌなどとてもないと言い、後でコロボックルなどいろいろな名前で行われた空想の説が出てくるのですが、実際はど

らも正しくなくて、縄文末期の文化です。ヘンリーは大森貝塚がアイヌ民族の遺跡であることを証明するために、昭和11年に北海道の沙流谷という、今でも割とアイヌの集落がたくさん残っている地方の調査に出掛けました。そのコレクションはウィーンの民族博物館に入っています。

前頁の画面左下の写真は、ヘンリーがアイヌの家で鹿肉のシチューを食べて、オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフの誕生日を祝ったというものです。実は、昨日東京駅に着いて、駅内でカレーライスを食べようとしたら、鹿肉（ししにく）のカレーと書いてありました。日本では珍しいなと思ったのですが、鹿肉のカレーを食べてシーボルトを思い出しました。

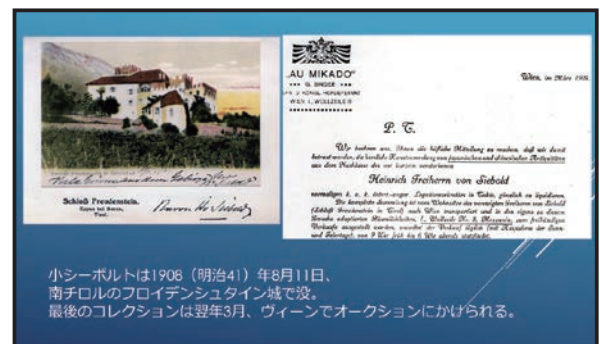
ったのですが、その統合の過程で目録が失われてしまったので、これを調査するのも、必要で大切な仕事だと思っています。



ヘンリーは1889年、日本の民族学関係のコレクションをウィーン皇室博物館に寄贈しています。現在は民族学博物館、世界博物館ですが、当時は自然史博物館の一部でした。これは合計5197点の大変なコレクションでした。目録上5000点というと、実際はその3~4倍ぐらいの数なのです。例えば矢筒に矢が入っていると、目録上は1点になるのですが、矢筒と矢を全部数えると6点になるとか、鎧は1点でも、兜、胴丸、マスクなどいろいろなものを数えると10点になります。だから、これは膨大なコレクションで、父親のコレクションや同時代のピーボディー博物館のモースコレクションと匹敵する数と内容のコレクションなのです。



ヘンリー・フォン・シーボルトがもう一つよく集めた分野は、仏教美術でした。先ほども申し上げたとおり、神仏分離が行われたことで、仏教関係のものはほとんどただで持っていくことができました。左は金剛界曼荼羅です。曼荼羅は幾つもウィーンにあります。右は、もともと本郷丸山にあった徳栄山本妙寺、今は巣鴨の近くで私もお参りに行ってきたのですが、そこの開山のお坊さんの智存院日慶の坐像です。江戸初め、寛文12年のものです。これはウィーンの世界博物館に保管されています。



仏教美術のコレクションは、何度かに分けてウィーン的应用美術博物館(工芸美術館)に寄贈されています。19世紀の終わりごろには、今の博物館の前身である商業博物館や東洋博物館など、幾つかの博物館があり、それらが統合して应用美術博物館にな

美術コレクションは应用美術博物館、民族学関係は自然史博物館に寄贈したのですが、もう一つの大きなコレクションは手元に残していました。そして、日本からヨーロッパに帰って、南チロルのエツパン

という村にあるフロイデンシュタイン城を購入して、そこでコレクションを展示したのです。残念ながら1908年の夏に若くして亡くなり、奥さんも2〜3カ月後亡くなったので、そこにあった膨大なコレクションは1909年のウィーンのオークションハウス、Au Mikadoで競売にあって、行方も分からなくなりました。2〜3点だけはウィーンの博物館に残っているのですが、前頁の画面左の絵はがきはシーボルトが亡くなる半年前、日本の独文学者、中目覚に出したはがきです。



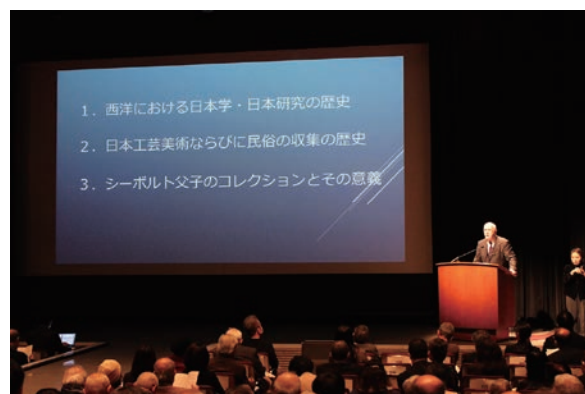
そろそろ締めくくりになりますが、シーボルトの素晴らしいコレクションを中心に、16世紀以来、何百年にわたってヨーロッパで集められた日本関係コレクションは、現在、50万〜60万点はあるでしょう。これらを収蔵している博物館は現時点で300か所以上を把握していますが、ほとんどどこの国でも多かれ少なかれ日本関係コレクションを見付けることができます。つい最近は、誰も予想できなかったのですが、アルバニアのコルチエという町に東洋美術館ができて、アメリカの軍人として日本でマッカーサーの付き添いをした、アルバニア出身の写真家が自分のコレクションをそこに寄贈しています。第二次大戦後のコレクションです。山田寅次郎の活躍があったトルコにももちろんあります。不思議なのはポルトガルとスペインです。一番早く日本との交流に入った国である割には、全体としてそれほど数は多くなく、しかも、なぜか個人コレクションが大勢を占めているのです。16〜17世紀のスペインの貴族が

館に今でも日本のものをたくさん持っているのですが、公にしないのです。19世紀、明治に入るとスペインは世界政治の舞台に出なくなったため、今スペインの博物館が持っているものは往々にして林忠正などの画廊を通じてパリで購入したものです。

一番多いように見えるのはイギリスですが、それはイギリスの調査が徹底していて、よく報告されているからです。フランスが少ないのは、国際協力の調査にあまり参加しないからで、実際は結構あると思います。そういうコレクションは、これから展開する新しい日本学、新しい日本研究の基礎になるのではないかと期待しています。すなわち、大学の研究所と博物館の協力体制がこれから強くなければなりません。そして、モノを視野に入れて、立体的な日本像を考える日本研究が行われていくことを期待したいと思っています。

あまりまとまった話ではなく、大変失礼しました。ご清聴ありがとうございました（拍手）。

(司会) クライナー先生、どうもありがとうございました。少しも飽きることなく。しかし、大したものですね。私たち日本人よりもずっと上手な日本語でお話しされていたので、感嘆しました。それでは、これより休憩に入りたいと思います。



ジャポニズムの先駆けとなった シーボルトの植物

東京大学名誉教授 大場 秀章

(司会) 続きまして、東京大学名誉教授の大場秀章先生によるお話で、「ジャポニズムの先駆けとなったシーボルトの植物」です。



皆さん、こんにちは。今日のシンポジウムの中では少し毛色の変ったスピーカーだと思いますが、三つの課題に分けて話をさせていただきたいと思います。私は植物学の研究者で、決して文科系の研究者ではないのですが、シーボルトは、私など足元にも及ばないほどいろいろな分野の研究を手掛けています。その中で植物はとくに重要な分野の一つだと思います。私はシーボルトの植物学への貢献を、シーボルトが採集した標本そのものに基づいて研究するというのを、ここ10年以上続けています。

さらに、シーボルトの関心は全く理学的な立場での植物研究だけでなく、日本から持ち帰った植物を、園芸植物がきわめて乏しかったヨーロッパの庭に広げ、ヨーロッパの庭園を日本の植物で変えていこうと考え、日本の植物の園芸的な研究を展開しました。そのことについては日本ではあまり研究が行われておらず、また私自身もまとまったことは書いていないのですが、シーボルトが当時のヨーロッパ社会に対して行った貢献の中では、見落とすことのできない重要な貢献ではなかったかと思っています。

三つ目に私が興味を持ち、最近考えていることとし

て、シーボルトが導入した日本の植物は、美術工芸を中心にして、いわゆる園芸の範囲を超えて、広くヨーロッパの文化へと影響を及ぼしていることです。これは私からすると専門外のことであり、園芸以上にお話しするのはおこがましい話なのですが、調べたことの一部を紹介させていただければと考えています。

では、植物学者としてのシーボルト、園芸植物を研究したシーボルト、そしてシーボルトの持ち帰った園芸植物が当時のヨーロッパ社会にもたらした影響という順番に話をさせていただきます。

1. シーボルトの植物研究：『日本産有用植物概要説』と『日本植物誌』

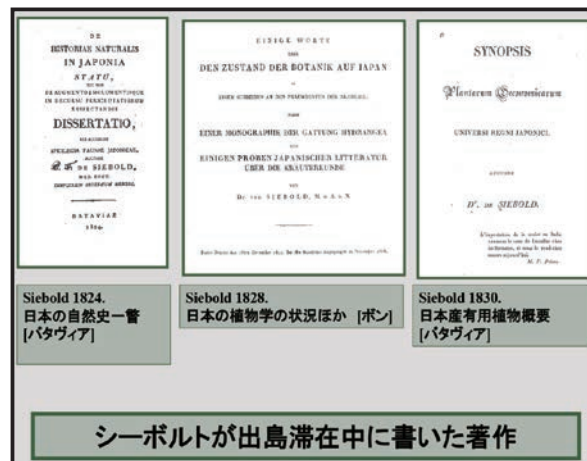


図1. シーボルトが出島滞在中に書いた著作

シーボルトは1823年来日しますが、日本に滞在している最中から、日本の植物をただ集めるだけではなく、日本の植物や日本の自然についての研究を展開しています。日本にいた間にいくつかの成果報告などの草稿を書いて、そのうち二つは東インド

政庁のあったバタヴィアで出版されています。その3番目『Synopsis Plantarum Oeconomicarum』という表題が付いていますが、今日の近い言葉で翻訳すれば、『日本産有用植物概説』というタイトルの出版物です。

シーボルトが来日した目的は、個人的な興味に加え、当時、オランダあるいは東インド政庁が進めようとしていた日本についての、特に日本の博物資源に関する研究を推進するという大きな課題を担われていたと思われる。その中でも有用性のある博物資源の研究が大きな課題になっていたはずで、それに応えるべく、この『日本産有用植物概説』を執筆したと思われる。

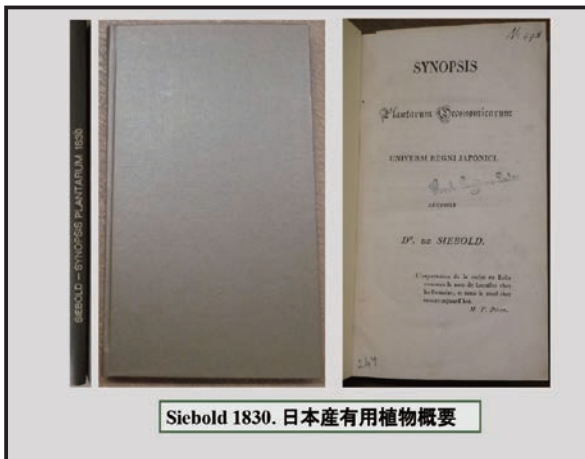


図2. シーボルトが1830年に著した Synopsis Oeconomicarum Japonicarum…日本では『日本産有用植物概説』または『日本産有用植物概説』と訳されている



図3. 上記の著作の本文の一部。LXXXVIII (88) は同書での属の掲載順を示す番号。Celtis はリンネによって命名されたエノキ属の属名

この中身は、先ほどクライナー先生もおっしゃっていましたが、非常に網羅的な仕組みになっていて、自分が採集・観察することができた全ての植物を取り上げ、逐次的にその植物の種名、日本の名前、そして研究に用いた標本を挙げ、日本におけるそれぞれの植物の利用分野、利用の仕方を取り上げて、記述しています。全ての植物について、全く同じフォーマットで記述が続けられているのです。

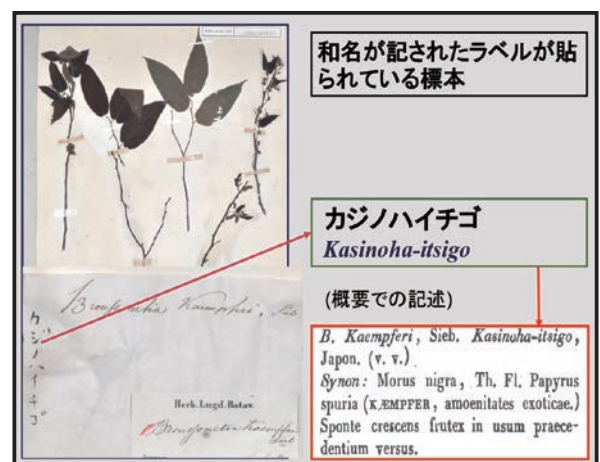


図4. 『日本産有用植物概説』に載るカジノハイチゴの証拠標本

シーボルトの『日本産有用植物概説』の大きな特徴は、シーボルトが伝聞だけでその記述をしているのではなく、必ずそれぞれの記述には元になった標本があって、確実にその標本を用いて、種の同定等をしていることです。これはとても大きな意味があります。人間のやることですから、例えば伝聞などでカジノキというような植物の名を聞いたときに、カジノキという植物を取り上げて、これは紙を作るのに用いるというような記述をするということはままあることだと思います。しかし、そのカジノキという名前が与えられる植物は、現在においても、地域によって異なる植物を指しています。カジノキそのものである場合もあるし、類似のコウゾという植物をカジノキと呼ぶ地域もあるわけです。従って、シーボルトが『日本産有用植物概説』の中でカジノキという植物を取り上げたとき、それが一体どの植

物を具体的に指しているのかということ、標本に当たらない限り分からないわけです。

今までの研究は、主にドキュメントの分析を中心に進められてきました。つまり、『日本産有用植物概説』に挙げられた植物名を現在その名称で呼ばれている植物と同じであると仮定することで研究が展開されてきましたが、厳密には、シーボルトがその名前前で呼んだ植物を彼のメモなどが残る研究の基礎となった標本に当たって、同定をやり直すというところから始めることが大切です。その仕事を何年かけて私たちは続けてきたわけです。例えば、シーボルトが概説で取り上げているカジノキの基礎となった標本は、標本と一緒に貼り付けられた付箋に書かれた日本語、「カジノハイチゴ」にもとづくことができます。これをシーボルトは「Kasinoha-itsigo」と書いたのです。ドイツ人ですからSが濁って「カジノハイチゴ」と読んだことだろうと思います。

台紙に貼られた植物を詳しく検討して見ると、それはカジノキではなく、コウゾに近縁なヒメコウゾであることが分かります。ですので、シーボルトはヒメコウゾをカジノキと認識して、その用途その他の記載を行ったわけです。このように概説の記述をまず逐一に標本に当たって分類学的な研究を進めていきました。その結果から、シーボルトが記述しているそれぞれの植物の正体が明らかになり、今日の名称なども分かり、さらに種毎に蓄積されているぼう大な情報も考察に利用することができるようになります。



図5.『日本産有用植物概要』と『日本植物誌』(Flora Japonica)

なぜ『日本産有用植物概説』がシーボルトの植物研究の中で重要な位置を占めるかということ、シーボルトの植物学的研究の最大の成果は、『日本植物誌(Flora Japonica)』の出版にあります。『Flora Japonica』というのは、表紙にも書いてありますように、Plantas ornatui vel usui、つまり ornatui は飾り・鑑賞 (ornamentation)、usui は利用 (use) で、表題こそは『日本植物誌』ですが、シーボルト自身の『日本植物誌』出版の意図は、日本の鑑賞用植物と有用植物を記載するものであったわけです。

『日本植物誌』は、当時の植物学の水準からみて深い内容を持ち、しかも分析も確かで、見事な出版物だと言えます。しかし、この『日本植物誌』を検討してみると、シーボルトの意図として、来日直後に始めた有用植物の研究がこの出版に大きく関わっていることが分かります。シーボルトは、有用植物というものを日本で研究する植物の対象として重視していたことが分かります。ただ、ここで注目しなくてはいけないことは、『日本産有用植物概説』の段階では、ornatui、すなわち、鑑賞用の植物は、まだシーボルトの眼中にはないということが分かります。そして『日本植物誌』を刊行する段階になって、シーボルトは日本の植物が潜在的に有している観賞用の

園芸植物としての価値を発見したことが分かります。

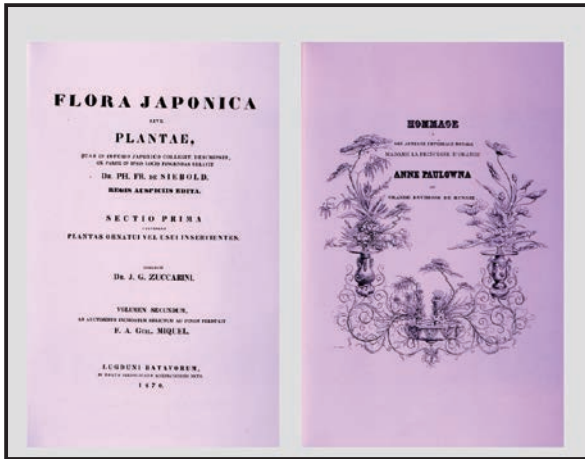


図6.『日本植物誌』の表紙(表、裏)と扉

これが『日本植物誌 (Flora Japonica)』の扉ページです。『日本植物誌』の姉妹篇ともいえる『日本動物誌』の扉ページには十二支に登場する龍、あるいは麒麟のような想像上の、日本での伝統的文化を感じさせるデザインが採用されています。しかし、『日本植物誌』の扉ページのには現在のは出島にあるケンペルとツェンベルクの貢献を讃える記念碑が中心に描かれています。この2人は、シーボルトに先立ち日本の植物を研究した学者です。コウシンバラだけは別ですが、碑の周りはいずれも日本の植物で飾られています。いかにも日本は優れた鑑賞用園芸植物の宝庫であるということを伝えようとする意図が感じられる扉絵を掲げています。こうしたことから、

シーボルトが『日本植物誌』にかけた目的、意図が読み取れるような気がします。



図7.『日本植物誌』に載るサザンカ(左)とカノコユリ(右)

この『日本植物誌』で、シーボルトは前任者のカール・ペーター・ツェンベルク (Carl Peter Thunberg) たちが記載した植物をもちろん取り上げましたが、新種として多くの植物を記載していきます。なお、『日本産有用植物概説』はシーボルト単独の著作ですが、『日本植物誌』はミュンヘンの植物学者ツッカーリーニとの共著として刊行されています。

代表的な植物をいくつか紹介しましょう。まずサザンカです。Camellia sasanqua という学名をシーボルトたちはこの植物に与えますが、自然に生えている野生のサザンカの花色は、図の右下に描かれているような白色のものです。シーボルトはそれをわざわざ描いているくらいですから、この事実は知っていたと思われます。ですが、大々的に取り上げたのは紅色花の個体です。シーボルトの時代、江戸や長崎で、サザンカとして観賞目的で植えられていたサザンカの多くは、既にツバキの遺伝子が入った紅色花のサザンカだったことをこの図は示しています。園芸史からも興味深い作品ですが、植物画としてもなかなか魅力的です。

続いてカノコユリです。シーボルトが日本からユリを持ち帰る前まで、ヨーロッパで普通の人を知っ

ていたユリは、ニワシロユリというテッポウユリを小型にしたような白花のユリでした。ニワシロユリは聖母マリアが手にするユリで大切な花でしたが、一方で葬儀の際に用られる花でもありました。

カノコユリはニワシロユリの花よりも格段に大きく、しかも花は紅色で、花卉は車状に広く開きます。ニワシロユリはテッポウユリのように花卉はあまり開かず、花型が鉄砲状で、見栄えもカノコユリに劣ります。カノコユリのような見事なユリが自然界にあること自体、ヨーロッパの多くの人たちを驚かせました。カノコユリの球根は同じ重さの銀と取引されたといわれるぐらい、センセーショナルな話題を生んだ植物でもありました。



図8. シーボルトが *Hydrangea otakusa* と命名したアジサイ(オタクサ)の『日本植物誌』の図版と生品

シーボルトといえば、妻である滝との関係が有名ですが、恐らく滝さんの名前を用いたと思われる *Hydrangea otakusa* (ヒドランゲア・オタクサ) というアジサイをシーボルトは記載しています。アジサイつまりヒドランゲア属 (*Hydrangea*) は、英語読みでハイドランジアですが、後に重要な観賞用園芸植物となっていくものです。シーボルトがオタクサの名前で絵に描いて広めたアジサイは、今でも生きています。この二つを見比べていただくと、花色こそ現在のものの方が白味が強いですが、半球形の花序や葉の形など、シーボルトの時代のオタクサと呼ばれるアジサイと今の

アジサイの一部は、シーボルトらの記載を読むとほぼ同じものだっただろうと思われます。

2. ヨーロッパに運ばれた日本の園芸植物

シーボルト関係年表	
◆1498年	バスコ・ダ・ガマ喜望峰経由でインド洋に出る(大洋の時代の幕開け)
◆1715年	イギリス東インド会社が広東に事務所開設
◆1778年	ツェンベルク、ロンドンでツバキ生品をバンクス卿に。一部がピルニッツ宮殿に現存。
◆1780年以降、	広東からイギリスに向けた植物の移出盛んに(種苗商、園芸家、植物学者が活躍)
◆1823年	シーボルト来日
◆1824年	ラインワルト教授の支援でオランダの花卸商が4ケースの日本植物を輸送。うち80が生きた状態でオランダのテセルに到着する

表1. シーボルトに関係した年表

続いて、園芸についての話に移りたいと思います。シーボルトの時代の背景を知るために、シーボルトに関係する年表を示してみました。1498年にバスコ・ダ・ガマが喜望峰経由でインド洋に出ることに成功します。このことは中学校や高等学校の世界史や歴史の教科書で習います。これを習ったとき、その重要性が分からなかったのですが、実はとても重要な意味があったのです。日本や中国のものが西ヨーロッパに伝わる経路としてシルクロードが有名ですが、それは陸路で物資を運ぶルートです。小さなものや乾燥しても構わないものは運べましたが、砂漠やラクダの背中に乗せて運ぶ陸上のシルクロードで植物を活かした状態でヨーロッパに運ぶことは不可能だったでしょう。日本や中国の植物がヨーロッパに伝わるのは、喜望峰を回ってではありますが、船に乗せて直接ヨーロッパに運べる航海路ができてからの話になるのです。ですので、渡来年代がどんなに古い植物でも、日本または中国の植物がヨーロッパに

伝わるのは、1498年すなわち喜望峰経由の航海路の確立以降の話ではないでしょうか。

日本は江戸時代、鎖国をしていて、オランダが唯一交易が認められた国だったので、私自身、日本の物品にはオランダを通してヨーロッパに伝わったのだと、ついつい鵜呑みにしてしまう癖があります。しかし注意しなくてはいけないのは、オランダより1年早く、イギリスも東インド会社を設立し、1715年には中国の広東に事務所を開設します。中国船、あるいは日本に寄港した東南アジアの船が、日本の物品を広東に運んだ可能性はありえることでしょう。もしそうだとすれば、日本の植物が必ずしもオランダを経由してヨーロッパに伝わったのではなく、日本から広東に運ばれて、そこからヨーロッパに運ばれた可能性もあるを示唆します。

1776年に、ツェンベルクが日本に来ます。彼は帰国後、日本の最初の植物誌『日本植物誌』(Flora Japonica)を出版しますが、日本からの帰路の途中である、1778年12月、自分よりも前に日本に来たエンゲルベルト・ケンプファー (Engelbert Kaempfer)の標本を見るために、ロンドンに立ち寄ります。そこでイギリスの科学界のボスである、ジョゼフ・バンクス (Joseph Banks) に会うのですが、そのときに日本から持参したツバキの生きた四株の苗をお土産としてバンクスに献呈しました。



図9. ピルニッツ宮殿(ドレスデン近郊)のツバキと冬季保護のための移動式温室

それらの四株のツバキのうち、一つはバンクスが再建に関わっていた、今日のキュー王立植物園の前身である、王室の庭園であったキューガーデンに植えられるのですが、それは枯れてしまいます。唯一生き残ったものが、ドイツのドレスデンのピルニッツ宮殿に分与されたもので、そのツバキは今も生き残っています。このピルニッツのツバキは有名で、高さは8mぐらいあります。このツバキはまごうことなく、関東付近のツバキではなくて、花冠があまり開かない、長崎周辺など西日本に野生するツバキだと思われます。こういうものが生き残っています。ツバキは寒さに弱いので、冬のとくに寒いドレスデンでは管理のために温室が必要になりますが、夏には温室は不要になります。現在、ピルニッツ宮殿では、温室をレールを使って移動させています。温室が取り払われた夏は、外気に晒されますがツバキは成長を続けます。とても大切にこのツバキが栽培されていることが分かります。

話が少し飛びましたが、ツェンベルクがヨーロッパにツバキをもたらしたのは1778年です。しかしイギリスでは、このとき既にツバキが栽培されていたようです。ロンドン近郊に邸宅を構えていたペトレ男爵という、大の植物好きの庭の温室ではすでにツバキは1739年に導入栽培されていたことが記録に残

っています。誰が運んだかは分かっていませんが、日本のツバキが少なくとも1739年には既にヨーロッパに到達していたことが分かります。日本の植物への関心を広めたという意味では、ツバキは象徴的な植物であるかもしれません。

1780年以降になると、中国の奥地への進出が徐々に進みます。その中国奥地がとてつもない植物の宝庫であることが分かると、その発見とヨーロッパでの販売を目論んで、多数の園芸家やいわゆるプラントハンターらが奥地に入り、それらの植物を広東からヨーロッパから送り出していきます。もちろん、船で日本から広東に運ばれた植物も、それと一緒にヨーロッパに渡ったものと思われます。このような背景でのシーボルトの来日です。ですから、シーボルトが日本に来たときには、既に日本はともかく、お隣の中国の植物はヨーロッパ、特にイギリスには盛んに輸出されて、栽培されていたのです。このことは、これまでのシーボルト研究の中ではほとんど語られてはきませんでしたし、日本植物の輸出史の中でもあまり話題にはなってはいませんでした。

シーボルトの来日は1823年ですが、シーボルトはこのようにイギリスの中国における植物探索や園芸の導入について把握していたのでしょうか。オランダでは花卉商の一部がこのような状況をキャッチしていた可能性があります。一部の花卉商が、オランダ領東インドでの植物や物産調査に携っていたラインワルト (Caspar Georg Carl Reinwardt) に働きかけ、4ケースの日本植物を輸入し、そのうち80が生きた状態でオランダのテセル港に到着したことが記録に残されています。

このときシーボルトは日本に滞在していましたが、このような動きを認識していたのでしょうか。シーボルトは来日の翌々年、1825年に日本から大量のチャノキの種子をバタヴィアに送り出していますが、オランダに向け観賞用の植物を移出するのは1828年以降です。日本の植物でヨーロッパの庭を変えたい

というシーボルトの意識は彼自身の日本滞在の体験から自発的に生まれた発想だと私は考えています。

シーボルトと植物

- ◆1829年 最初の植物移出がヴィルヌーヴにより実施
500種類以上あり、100種類のみが生き残ったとされる。江戸参府、1826-28年間の出島栽培株
- ◆1829年 シーボルトによる移出。332種類中生き残りは38種類。荷はドルドレヒト着後ライデンに移送。
- ◆1830年 ジャワに戻る際に、2500種類12800株の植物を携行、うち500種類800株は良好状態で到着したものの、アントワープには260種類の生品と球根のみが生きた状態でつく
- ◆1830年10月 ベルギー独立にともない、当初オランダ(ライデン)には移送できず、ヘントから広まる

表2. シーボルトの日本植物ヨーロッパ移出

シーボルトを園芸界において有名にした最大の功績は、日本から多くの植物をヨーロッパに持ち帰り、それを広めたことです。シーボルトは、分かっているだけで3回、日本の植物を彼自身で、あるいは彼の指導の下にヨーロッパに輸送します。最初は1828年で、このときは江戸参府で集めた植物や、それまでに集めて出島の植物園で栽培していた植物が運ばれます。137点中、80点が生きた状態で、ライデンに到着したと記録されています。

翌年の1829年には、シーボルトによって332種類の植物を移出しますが、生き残ったのはわずか約1割に過ぎない38種類がライデンに移送されたことが記されています。この両方の輸出によって、オランダには少なくとも100種類以上の日本の植物が渡ったことになり、それらはライデン大学の植物園で栽培されました。

シーボルトは1830年にオランダに帰るのですが、帰国に際して、シーボルトは多数の植物を携行していきますが、そのうち485種類1200株が良好な状態でバタヴィアに到着したと書かれています。バタヴィアで別の船に積み替えられて、生き残った状態でアントワープに着いたのはわずか260種類の生品と

球根だけだったと記されています。シーボルトは帰国に当たって植物だけでなくすべての物品を船に積み込んだわけです。このとき積み込まれたものの中で話題をさらったのは、この船に乗っていた生きたオオサンショウウオです。このオオサンショウウオはヨーロッパに着いてから大いに話題となり、見世物にもなって、以後40年間、アムステルダムで生き延びて、多くの人たちに日本の動物の知識を広めたことだろうと思われます。

注意すべきは1830年にシーボルトが帰国に際して送った植物です。1830年10月に、それまでオランダの一部であった今のベルギーが、オランダから独立を求めて交戦状態になり、結果としてベルギーは独立します。当時オランダであったブリュッセルに、ブルーム（Carl Ludwig Blume）を初代館長にする王立植物標本館が発足し、シーボルトの植物標本はオランダの国家事業として採集されたものだったので、その王立植物標本館のコレクションになる予定でした。標本はこの独立戦争の最中に到着してしまったのです。標本は国家のものであったために、他の王立植物標本館に収蔵されている標本とともに、ライデンに移送することができました。しかし、生きた植物のコレクションはシーボルト個人の持ち物なのか、国家のコレクションなのか、はっきりしなかったために、シーボルトは日本から持ち帰った生きた植物のコレクションをライデンに移送することはできなかったのです。生きている植物を対象に時間をかけて交渉する余裕はなく、今はベルギー国の一部になっているガン（オランダ語ではヘント）にある植物園に、それらのコレクションは植えられることになってしまいました。このことが、偶然とはいえ、後々シーボルト、そしてシーボルトが持ち帰った植物が園芸界に大きな影響を及ぼしていきます。



ライデン市内に現存するシーボルトの旧居。現在はシーボルト・ハウスとして公開されている

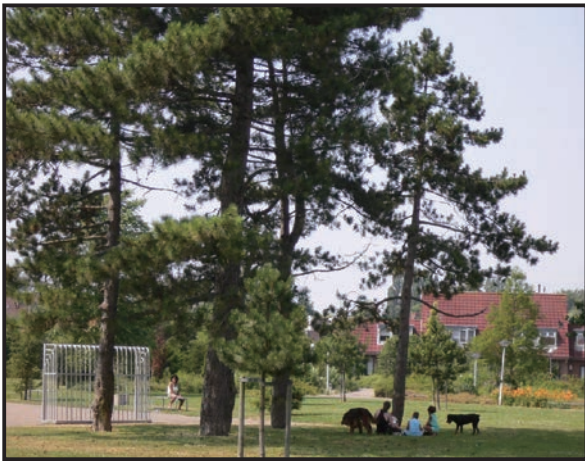
写真は、オランダの古い学術都市ライデンのラーペンプルフという、運河に面し建つシーボルトが住んだ邸宅です。今はシーボルト・ハウスとして一般公開されています。



ライデン郊外に設けられた馴化植物園内に建てられたニッポン邸

シーボルトはライデンに自宅を求めて住んだわけですが、ライデンに持ち帰り、ライデン大学の植物園に植えてあった日本産の植物を増やして、それを多くの人に分与したいと個人的に考えていました。そのためには、日本の植物をヨーロッパの気候に慣らすことがどうしても必要だと考えたわけです。また、1年草であれば、毎年種子を取らなくては絶えてしま

うので、育てて種子取りをすることも必要になります。このような植物の栽培や繁殖などのために必要な土地をラーペンプルフの運河沿いに見出すことはむづかしく、シーボルトはその場所をライデン市の近郊の、ライダードルプに求めます。そこに Jardin d'acclimation(日本語では気候馴化植物園)を造ります。また園内には「ニッポン邸」という邸宅を造り住みます。ここで日本から持ち帰った植物をヨーロッパの土地に慣らしながら、増殖し、種子の採取を行いました。



旧馴化植物園の跡地



旧馴化植物園のあった辺りの小路名。「シーボルト通り」、「出島通り」、「ジャワ通り」など日本や東インドにゆかりの地名が用いられている

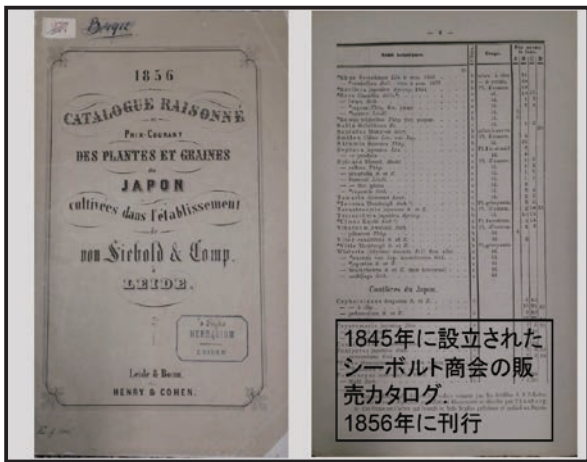
今、馴化植物園があったと思われる場所には、なんの跡形もなく、おそらくここがそうだろうと思わ

れる所が公園になっています。周辺を歩いてみると、小さな通りの名称に Sieboldstraat (シーボルト通り)、Javastraat (ジャヴァ通り)、Decimastraat (出島通り) という、シーボルトやかつてのオランダ商館ゆかりの名称が与えられていて、印象に残ります。



オランダ王立園芸振興協会年報の表紙

今見たような準備を着々と進めていき、帰国からすでに10年以上過ぎていますが、日本の植物をオランダだけではなくヨーロッパに広く広めるための仕掛けを、シーボルトや関係者たちが考えていきます。そして1842年に、日本を含むアジアや新大陸の園芸向き植物の導入を促進する目的で、オランダ王立園芸振興協会が設立されます。王立となっているのは、この振興協会に一定の理解が示された結果です。Guillaume (ギヨーム) は、オランダ語の Willem (ウィレム) のフランス語表記で、ウィレム2世の名前が入った趣意書が作られています。

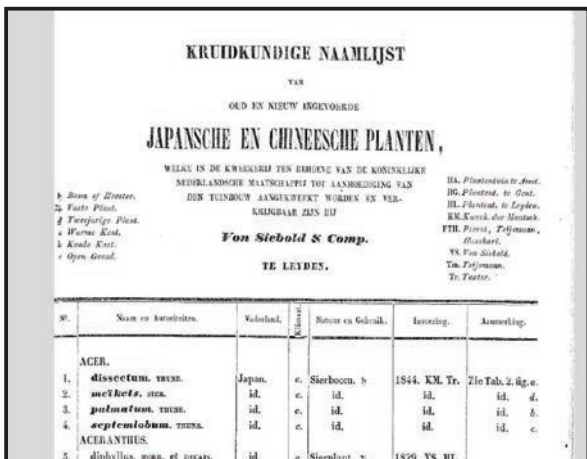


1845年に設立されたシーボルト商会の植物販売カタログ(1856年刊)

パの庭を変えたいと望んでいたシーボルトは、この頒布を通して一定の目的を果たしたといってよいでしょう。



『オランダの庭園花』(1858年)の表紙



同カタログの一部

しかし、カタログ販売というのは、ただ名前を列挙すれば売れるというものではないようです。今日の各種の園芸カタログに目を通すと、そこには必ず花が咲いたときの写真などが提示されていて、栽培するとういう花が咲きますというイメージを抱くことができますが、シーボルトもこのカタログを出した直後にそれに気がきます。

1845年の実際の日本・中国の植物の販売では、直接園芸振興協会が行うのではなく、園芸振興協会の指示を受けた民間会社が行うかたちをとっています。表示したようなセールスカatalogが作成されました。Von Siebold & Comp. とは、日本語では「シーボルト商会」と呼ばれています。カタログには、各種の植物について、原産がどこで、どういう状態かなどを一定の書式で詳しく書いたリストが作られて、販売が行われました。これは、今日の通信によるカタログ販売です。シーボルトは既にカタログ通信販売を1845年に実行していたわけですから、かなり進取の気性のある人だったのではなかったかという印象を抱きます。頒布の中心にあるのは日本と中国、とくに日本の植物です。まさに、日本の植物でヨーロッ

1858年になると、実際どういう花が咲くのかを知らしめたいという目的で、これも国王に働き掛けて『Flore des Jardins』(オランダの庭園花)というタイトルが付いた機関誌を刊行します。



『オランダの庭園花』中のポタン(左)とシャリンバイ(右)の図

そして、その中で実際に園芸に向いていると彼らが考えた植物を絵入りで紹介して、種子をまけば、あるいは苗木を買って育てれば、このような見事な、これはボタンですが、花が咲きますよというような宣伝をして、セールスに努めたわけです。



『オランダの庭園花』中のゲンペイモモ(左)とヤマブキソウ(右)

例えばこれはヤマブキソウです。これは最近では姿を見なくなりましたが、つい最近までは武蔵野の谷津谷の斜面などに生えていた、雑草とは言わなくても野草の一つで、普通の植物でしたが、そういうものも、このように図示されてみると、なかなか鑑賞価値のある植物だという気がしてきますが、こんなものも出していました。

面白いのは、ゲンペイキクモモという名前のモモです。星印を付けましたが、こういう名前は実際にはないのです。モモはヨーロッパでも知られた植物でした。なぜ知られているかという、実を食べると、もう一つ、種子を食べます。その種子をアーモンドというのです。ですので、よく知られた植物だったわけですが、日本はそのモモの花を鑑賞したのです。これはヨーロッパの人たちにとって非常に驚きでした。シーボルトは特に観賞用のモモ、いわゆるハナモモの品種をいろいろと集めて持ち帰りました。その中の一つであるゲンペイキクモモは、一つの株に白い花びらの花と赤い花びらの花が混ざる

源平咲きで、なおかつたくさんの花びらが付く菊咲きのモモです。こうしたものは残念ながら日本ではほとんど見られないので、シーボルトが持ち帰って絵に描かせて、標本はあるのですが、ヨーロッパでも見たことはありません。この絵はそんなものがあったという存在を記録している重要なものです。

シーボルトが帰るまではベルギーとオランダの国境はなく、オランダとして一帯の地域だったわけです。シーボルトもそうですが、バタヴィアから来る船は、潮の関係などさまざまな理由で、アントワープに着いたり、ロッテルダムに着いたり、いろいろな所に入港しており、特に決まった港があったわけではありません。当時の港というのは、ヨーロッパはどここの国もそうですが、海に面して港があるわけではなくて、川の河口に港湾施設があったので、どこに着くかは、決まっているものもあったかもしれませんが、シーボルトの場合もそうであるように、時によって異なっています。

ブリュッセルの中心にある名所、パレ・ロワイヤルから南東に出るナミュール通り8-12に建っている建物が、



オランダ王立植物標本館が設立された時に使用された建物。ブリュッセル(ベルギー)市内にあり、現在は他の機関が使用している

かつてオランダ王立植物標本館が入っていた建物で、王立植物標本館の最初の建物です。シーボルトの標本もここに入るはずだったのですが、先ほど申し上げ

げたようなことで、ライデンに運ばれました。



ヘント(ガン)市内の中心部

これはヘントの町の中心部で、なかなか貿易で栄えた町です。



現在のヘント植物園

その一角に、今は大学の施設になっているヘントの植物園があります。ここに彫像があるのですが、植物学とはあまり関係なくて、この植物園をつくった男爵か何かの立像です。



現在のヘント植物園の様相

今の植物園を見ると、このような形で分類花壇などが造られていて、大学の教育向きの植物園に全く姿を変えてしまっていますが、昔はいろいろな木が植えられていたことの片鱗として、例えばヨーロッパでは、大学の植物園にはあるけれども、北ヨーロッパでは少ないイチョウがあったりします。水生植物を植えたと思われる池などもあります。



ここからライデンに移り、これがライデンに移った標本のために最初に使用された、つまりライデンにおける最初の王立植物標本館として利用された建物です。この建物自体は今、植物標本館ではなく大学の施設として使われています。



建物の内部

ライデンで最初に王立植物標本館が使用した建物の内部

内部はこのようになっています、なかなかおしゃれな建物なのですが、シーボルトのコレクションを置くだけでも、これは狭いなということが直感できるような建物でした。

- ◆オランダ園芸振興協会は1882年に解散するが、その前に手持ちの日本産植物がファン=ハウテに引き取られ、販売される。
- ◆ファン=ハウテ没後シーボルト植物はナンシーに移され、エミール・ガレを中心に芸術家の関心を集める。
- ◆その頃高島得三がナンシーに留学中で、詩人モンテスキュー、小説家マルセル・ブルーストラを中心にジャポニズムが育まれる。
- ◆サミュエル・ビーングの日本の美術・工芸紹介本もこれに重なる。
- ◆芸術モチーフに用いられた植物の多くは実物がすでにヨーロッパで栽培されており対照することができた。



ルイ・ファン=ハウテ
Louis Van Houtte
1810-1876年

ルイ・ファン=ハウテと関連年表

さて、シーボルトたちが設立したオランダ王立園芸振興協会は、1882年に解散してしまいます。1882年は、明治15年で、上海とヨーロッパの間にはP&Oやジャ

ーディン・マセソン商会による定期航路が開かれていて、簡単に日本の植物をヨーロッパに移出することができた時代になっていました。そのため、シーボルトらのカタログによる販売もだんだん売れ行きが悪化していきます。解散こそ1882年ですが、それに先立ち、日本に明治政府が誕生した時点で、シーボルトの所有していたコレクションは、カタログによる販売ではなく、一手に引き取ってもらうような大きな引き取り手を探していました。

それに手を挙げたのは、シーボルトが日本から持ち帰った1830年のコレクションを栽培した経緯があるヘントの園芸家でした。ヘントに、ライデンの馴化植物園に残っていたオランダ王立園芸振興協会の全ての植物が引き取られていきます。引き取ったのはルイ・ファン=ハウテ (Louis Van Houtte) という人です。バン・ホーテ (Van Houtte) というカナダのコーヒーがありますが、その人とは無関係です。ファン=ハウテはその当時、実力を具えた園芸家で、ブラジルの植物を大々的にヨーロッパに導入した園芸家でもありました。

ファン=ハウテは、ヘントに園芸家や園芸志望者のための園芸学校を創設していました。その教育内容が優れていると評判も高く、ファン=ハウテの学校にはヨーロッパ各地から学生が集まってきたといわれています。もちろんファン=ハウテはシーボルトの日本コレクションを引き取って、販売します。シーボルトらは通信販売で売りましたが、通信による販売だけでなく、口コミによる販売、手紙を書いて推奨するなど多岐の方法が採られました。シーボルトらの売り込みでは成功しなかったフランスに、シーボルトの植物はよく売れたようです。

ファン=ハウテは1876年に亡くなりますが、その後、シーボルトの植物はフランス東部のナンシーにある植物園に移されます。買い取られたのかもしれませんが。そのあたりはまだ正確に掴みきれていません。ナンシーにシーボルトの植物が移送されることになったのは、ファン=ハウテの園芸学校で学んだたヴィクトール・ルモアン

(Victor Lemoine) という園芸家が、ナンシーの植物園にいたからです。ルモアンはヨーロッパのライラック、その他ヨーロッパで盛んに栽培されている植物の育種、品種改良で大きな成果を上げたことで有名です。ルモアンはシーボルトの植物に大きな魅力を感じていて、それが理由で買い取りを決めるのです。その魅力とは、単に販売すれば売れるというだけでなく、品種改良のために原種に用いたかったのです。実際、シーボルトのコレクションを用いて、タニウツギとニシキウツギの雑種を作るとか、アジサイの新しい雑種を作成して売るとか、またノリウツギの八重咲き品を作出するなど、日本の植物の新たな園芸化に取り組んでいったのです。

3. ジャポニズムの発展に与えた影響

ルモアンが活躍した当時、ナンシーにはよく手入れがされた植物園がありましたが、今は跡形もありません。それとは別に新しく設けられた植物園がありますが、両者は別ものです。

ナンシーはその後、いつか日本との関りも生まれます。ルモアンはファン＝ハウテに倣って、ナンシーにも園芸学校をつくります。その学校は日本語では「農林学校」と訳されていますが、正式には農林園芸学校というべきです。そこに明治政府からの派遣で高島得三が留学します。高島得三は、生野の鉱山開発に関ったことでも知られる、ジャン・フランシスク・コワニエ (Jean Francisque Coignet) からフランス語を習っています。後に政府の役人を辞めてからは、高島北海と名乗って独特の山岳画を描くのですが、少なくとも政府で雇われていたときには園芸に大変興味を持ち、育種にも関心を持ち、ナンシーに滞在している間には、日本のバラについての論文も書き、後に Rosa takasimae と彼に献名された新しいバラなども紹介しています。

高島が日本人でもあったことから、当時の日本好きの人たちがナンシーに集まってきて、植物を中心にしたサ

ロンがそこに形成されます。その中心になった人物は陶芸家のエミール・ガレ (Émile Gallé) です。彼のもとに詩人のロベール・ド・モンテスキュー (Robert de Montesquiou) や小説家として有名なマルセル・プルースト (Marcel Proust) なども加わっていました。これらの人たちは日本植物の大的ファンであっただけでなく、日本での植物の育て方、特に盆栽に大きな関心を寄せていました。マルセル・プルーストの有名な小説『失われた時を求めて』の中に出てくるシャルリュス男爵は、モンテスキューをモデルにしているといわれていますが、プルーストの書いた小説を読んでも、プルースト自身が園芸に対して深い造詣と日本植物について詳しい知識と情報を有していることが分かります。

こういう人たちが集まって、日本の植物、そしてこれらの日本の植物を描いた美術品、日本の植物をモチーフにした工芸品などを鑑賞し、あるいはガレのように制作するというようなことを続けていきました。彼らのこうした日本品収集は日本趣味ジャポニズム (Japonisme) に先行するジャポネズリー (Japonaiserie) の時代を生み出す原動力になったといえます。シノワズリー (Chinoiserie) に類するとしてジャポネズリーと呼ばれたのですが、初期の日本趣味、特に日本美術の愛好の機運が1870年ぐらいから盛んになります。ガレやモンテスキューらもそうした機運を盛り上げていくのですが、彼らは美術品からする観賞に止まらず、美術品に描かれることの多い日本の植物そのものにも深い関心を寄せ認識を深め、そうして得た知見をもとに美術品を鑑賞したといえます。

ガレ自身の作品が象徴しているように、彼らは日本美術だけでなく、日本の文化そのものが日本の植物相 (フロラ) の高い種多様性、すなわち日本ではヨーロッパとは比較にならない多数の種の植物が生え、それを人々は生活に利用し、美術作品もその高い多様性が反映しており、作品には多様な植物の中から選択した種を描き、また工作には様々な樹種や竹などを含む多様な植物を用い、色付けでも多様な植物や鉱物に由来する染料を

制作に用いていることを見抜いたのです。まさに自然、とくに植物の高い多様性こそ、日本の美術の重要な要素であることを理解していったといえます。

1878年にパリで行われる万国博覧会はジャポニズムの広範囲の受容の契機になるわけですが、そういう動きの前に、ジャポニズムの本質が日本の自然、とくに植物の多様性にあることを正しく認識していた人たちが存在したことは重要な意義が認められるでしょう。



サミュエル・ビングの Le Japon Artistique (「芸術的な日本」)の表紙と紹介されたエミール・ガレの作品. 図中の「日本の美術工芸」は「芸術的な日本」に読みかえる

ジャポニズムといえば、サミュエル・ビング (Samuel Bing) の雑誌『Le Japon Artistique』(芸術的な日本)がよく取り上げられます。1888年から1891年にかけて36巻が刊行されます。その雑誌は見事な日本風の表紙とともに多くの愛好家の関心を集めたといわれています。その21・22巻にアリ・ルナンは「日本美術のなかの動物」(I、II)を執筆していますが、植物を主題とした論考は見当たりません。私にはその理由は分かりませんが、1888年代にはガレらによる日本美術と日本の植物の多様性の分ち難い結びつきについての認識が、少なくとも美術界では常識的な理解となっていたためでしょうか。興味のある問題ですが、これ以上の深入りは止めます。

図の右側は、エミール・ガレが作った花瓶です。ちょうど折り畳みの屏風のような形をしたとても変わった形の花瓶で、日本を象徴する富士山だけでなく、日本

産の複数の花が写實的に描かれ、今日の日からみても新鮮な驚きを覚える作品です。



ルイス・ボーマーが横浜に設立したボーマー商会の「花目録」の表紙(右)とヤマユリの球根採取の光景

オランダの王立園芸振興協会は1880年に解散します。その年にルイス・ボーマー (Louis Boehmer) は、横浜にボーマー商会という日本の園芸植物を輸出する会社を設立します。彼は北海道開拓使として働いた人ですが、辞めて後に自らの園芸会社を設立したのです。図のようなカタログを出し、日本の植物の輸出を図ります。輸出の目玉はユリであり、ツツジでした。というか日本での多様性が高い植物と他地域にはない固有性の高い日本の植物の販売に力を注ぎます。

シーボルトが目をつけ、彼自身も努力した日本の植物、そして日本で作られた園芸植物、これを核にして、ヨーロッパで栽培できる園芸植物を作り出し、これを用いてヨーロッパの庭を変えていくという目論見は、実際にここで述べたようなかたちで進行していきました。シーボルト自身にとってはともかく、彼がもくろんだことは一定の成果をえたといつてよいでしょう。今や、日本の園芸植物は世界的な人気の的となり、園芸という世界を超えて、ヨーロッパを中心にジャポニズムの発展に多少とも与るなど、大きな影響を及ぼしていったのではないかと思う次第です。

(司会) 大場先生、どうもありがとうございました。

近世日本を語った異国人たち： シーボルトの位置

東京大学史料編纂所教授 松井 洋子

(司会) 続きまして、2題目のご講演に移ります。東京大学史料編纂所の松井洋子先生です。タイトルは「近世日本を語った異国人たち：シーボルトの位置」です。



ご紹介にあずかりました松井洋子です。私がある東京大学史料編纂所は、前近代の日本史に関する史料の収集・研究、史料集の出版を行っている研究所です。明治時代から、国内ばかりでなく、海外にある日本関係史料の収集を行っており、日本関係海外史料目録を作り、また重要な史料を日本関係海外史料の原文編、訳文編という形で刊行してきました。



私はその中で、江戸時代の日本とオランダの関係を専門にしています。長崎の出島にあったオランダ

商館の商館長は、公務日誌を付けていまして、史料編纂所での仕事では、その17世紀の部分の翻訳をしています。また研究会などで、ちょうどシーボルトの時代の商館長の日記を読んでいました。そんなご縁で、人間文化研究機構のシーボルトのプロジェクトにお誘いいただいて、参加させていただきました。



担当したのは、主にライデンの国立民族学博物館が所蔵するブロムホフ、フィッセル、シーボルトのコレクションの文献的な目録等の検討です。ライデン国立民族学博物館の学芸員、マティ・フォラー (Matthi Forrer) さん、それからシーボルトハウスのコーディネーターのフォラー・邦子 (Kuniko Forrer) さんと一緒に、ブロムホフの目録の翻訳を今やっけていて、もうすぐ刊行させていただきます。これはライデンのコレクションの中で3人のコレクションを明確に区別して理解しようという試みの一環となります。

先生方の非常に専門的かつ広範なお話の後で、若干雑駁になりますけれども、私は、江戸時代の日本の対外関係、日蘭関係の流れの中でシーボルトを見てみようというお話をさせていただこうと思います。

1. 近世の日本の対外関係とオランダ

よく知られているように、江戸幕府の対外政策は、中央権力として力の及ぶ範囲とその外をはっきり区別して、内に向けては厳しいキリスト教の禁止政策を取るとともに、出入国を徹底的に管理し、貿易を含めた外との関係を完全に掌握しようとするものでした。それは、具体的には四つの口といわれる4カ所で、国外との関係が取り結ばれるという形を取っていました。その位置付けは、国王と徳川将軍との手紙をやりとりするような関係がある通信、それから相手国王とは直接関係のない通商のみの関係、そして政治権力を持たない相手に対する関係と分けられますが、いずれも中華と夷狄というような発想で、徳川将軍との儀礼的な上下関係として、観念的には捉えられているわけです。

近世日本の対外関係：4つの口

場所	相手	担い手	位置づけ
松前	アイヌの人々	松前藩(軍役)	撫育
対馬	朝鮮王国	対馬藩(軍役)	通信
薩摩	琉球王国	薩摩藩(軍役)	通信
長崎	唐人・オランダ人	長崎の町(町の公役)	通商

長崎におけるオランダ人との関係もその一つです。他の三つの口での関係は、伝統的に関わりのある大名が軍役として担っていましたが、幕府の直轄都市である長崎では、対外関係も町の役として担われていました。そして、オランダ人はヨーロッパ人で唯一通商の国として来航を許されていたということになるわけです。

オランダ人は当初、平戸に拠点を置いていましたが、1641年以降、皆さんよくご存じの長崎の出島に商館を移します。その後、開国によって出島への居住が

強制されなくなるまで200年以上、出島は日本における唯一のヨーロッパ人の居住地でした。



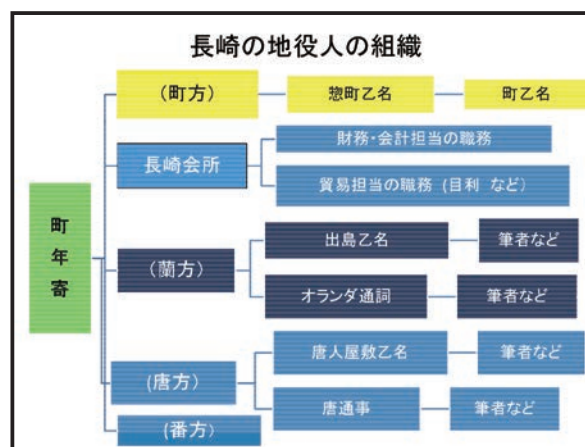
これは出島のよくあるというか、たくさんある絵のうちのひとつなのですが、大体4000坪弱ということで、外側の長いところが200m強、内側の短い方が170~180m、サッカーのフィールドを二つ並べたようなものとイメージしていただければいいかと思います。

ここにオランダの商館があったわけです。主要な業務はもちろん貿易ですが、その貿易の許可の条件として位置付けられるのが、キリスト教国、さらにアジアやヨーロッパの情勢についての情報、いわゆる風説を提供することでした。また、貿易の許可に対するお礼として位置付けられたのが、江戸の将軍に拝礼し、献上品を渡すために、江戸に参府することでした。江戸参府は、1790年に4年に1回に変更されるまでは毎年行われており、商館長や医師などが江戸へ往復していました。

オランダ船は、オランダのアジアにおける拠点であるバタフィア、今のジャカルタですが、そこから、帆船ですから、南の季節風に乗ってやって来て、取引を済ませると、北の季節風に乗って帰っていくということで、毎年1回来るわけですが、船の帰ってしまった後に出島に残るのは、実は20人足らずです。商館長と貿易に従事する何人かの商務員、実際には商品を管理したり、帳簿を付けたり、書記として記録を付けたりするのですが、それに医師、大工や職人といった生活を維持するための人たちが数人残った程度です。

オランダ東インド会社は、イギリスやフランスの東インド会社に比べても、より国際的で、多くのオランダ語ネイティブでない外国人の人たちを含んでいました。ただ、日本人から見ると、それらはみんなオランダ人として扱われていました。シーボルトもその一人で、ドイツやスウェーデンからの方が比較的多かったようです。その中に若干色の黒いアジア系の人もいて、彼らは商館員たちが個人的に連れてくる召使のような人たちです。

出島での取引の場面を描いた図などを見ますと、オランダ人以上にたくさん日本人がいます。長崎の支配の最高責任者は長崎奉行ですが、実は武士身分の奉行所役人は非常に少ないわけです。50人にも満たないということで、その手不足を補って、実際に多岐にわたる貿易業務を監督・管理しているのは、長崎の町人身分である地役人と呼ばれる人たちでした。



地役人の組織は非常に複雑なのですが、ごくごく単純化してしまえば、こんな感じということになるでしょうか。その数は17世紀の終わりでも、既に1000人以上の役人がいて、幕末にはその倍以上になったといわれています。オランダ人と関わる蘭方の役人といわれているのが、中に少し濃く書いてある出島乙名と阿蘭陀通詞で、この人たちを中心に仕事が行われていました。阿蘭陀通詞とは、文字どおりに言えば通訳者なのですが、単に右から左へ言葉を伝えるということではなく、貿易の実務を行う、そしてオランダ人に対して監視もするし、日本側の命令や情報を伝える、時には交渉の直接の相手であったりもしました。一方、オランダ側にとってみると、自分たちの意思を伝えてくれる代弁者でもあり、また、さまざまなきにまず相談する助言者でもあるという多様な側面を持っています。後でも少し触れますが、文化の伝達においても重要な役割を果たすことになります。

江戸時代には、出島も制度の上では一つの町として扱われていて、その支配の仕組みも町乙名、組頭がいるというような町の形を取っています。出島の家屋敷、オランダ人は借家人になりますが、家屋敷を所有している出島町人の代表者が出島乙名で、出島居住のオランダ人および島に出入りする日本人の監督責任者ということになります。ただ、出入りが管理されているということは、出入りする人が少な

いという意味では決してありません。オランダ人がわずかしかない中で、実際に貿易に伴う仕事、例えば荷物を運搬すること一つにしても、全て日本人が担っていましたし、オランダ人が生活するための人手も日本側が提供していました。通詞や乙名の監督の下に、出島には下働きの人たち、たくさんの人足たち、それから必要な物資を供給するための諸色売込人、コンプラドールと言われますが、そうした商人たちなど、さまざまな人々が実際には出入りしていたわけです。

貿易のしくみの変遷

- * 相対商売(1641-1671)
- 市法商法(1672-1684)
- 定高制の開始 (1685~)
- 正徳新例(1715-)
- * その後の貿易
- 日本側の区分 本方と脇荷
- オランダ側の区分 会社(政庁)と個人
- * 主要貿易商品
- 17世紀: 生糸・絹織物⇄金・銀・銅
- 18-19世紀: 綿織物・砂糖・薬種⇄銅

貿易の仕組みは、お手元のプリントにも少し書いておきましたが、当初は、「糸割符」といって一番上質な中国産の白生糸を統一価格で一括購入していた他は、入札によって取引していたのですが、日本側からの輸出品は、ご存じのように金や銀で、その流出が問題になります。流出を抑制するには、輸出品の値段を下げることによって支払額を減らすか、取引の総量を減らすかということになるわけです。最初は、値段を決めて、安い値段で一括購入しようとする市法商法というやり方を取りますが、それでも追いつかないということで、17世紀後半、1685年以降には、貿易の総量を制限する方向に変わりました。1年の貿易額を中国船は6000貫目、オランダ船は5万両、銀にすれば3000貫目と決めるというやり方です。

このやり方は次第に修正を重ねて、1715年の正徳新例に結実することになります。それは要するに貿

易総額を決める。それから船の数も決める。そして長崎会所という先ほどの図にも出ている役所が貿易と町の財政を統一的に把握する。一括で買い取った商品を日本人に転売して、買い取り価格との差額(利益)を市中に配分することで、長崎という都市を維持していくという仕組みです。

貿易船は全てオランダ東インド会社、会社がなくなってからは、東インド政庁が派遣するわけで、基本的には積んでいる荷物も会社や政庁の資本で仕入れられたものになるわけですが、それと並行して、その職員の地位に応じて、また会社の商品と競合しない形で、個人の商品を積むことも許されていました。日本側ではそれは、本方と脇荷という二つの範疇に分けて扱われていましたが、オランダ側にとってみると、個人の商品と、会社なり政庁の商品ということになります。個人の商品も、長崎会所が買い入れて、国内の商人に販売して、その金額の範囲内で、持ってきた人が帰りの船に積む荷物を仕入れることができるという仕組みです。

主な輸入品は、17世紀には中国産の生糸や絹織物、18世紀にはインドや東南アジアの綿織物が中心でしたが、砂糖や薬類なども次第に多くなっていきます。日本からはほとんど貨幣に準ずる金属類が輸出されており、17世紀には金や銀、18世紀以降は銅、さらに樟脳などが主要な輸出品でした。ただ、金額の上で主要な輸出品となることは別に、双方の異なる文化を背景とするような珍しいものが常に求められていたわけで、先ほどから何度かお話に出てきているような漆器や磁器、またヨーロッパからのガラス製品といったものが、そういう位置付けになります。そして、そういったものの出入りにおいては、個人が取引がかなり重要な役割を果たしていたものと思われる。

今、こんなオランダの貿易の話をしたのはなぜかといいますと、対外関係の枠組みが、日本を伝える、あるいは日本に何かを伝えることの在り方を規定す

る要素となっているだろうと考えるからです。つまり、シーボルトはドイツ語ネイティブのドイツ人でありながら、1度目の来日においては、長崎出島のオランダ商館の医師として赴任し、出島のオランダ商館が担っていた江戸参府に随行し、また、オランダの貿易の仕組みの中にあつた個人取引にも関わっているのです。

2. ヨーロッパ人の伝えた日本

シーボルトが日本文化を紹介したという話以前の状況について、先ほどのクライナー先生のお話などにも若干ありましたので、簡単にご紹介しておきます。日本に関する情報は、何も江戸時代からというわけではなくて、それ以前、16世紀半ば以降、ヨーロッパ人が直接日本に来るようになると、当初は宣教師たち、例えばルイス・フロイス（Luis Frois）の『日本史』のような形で、宣教師たちの立場からの伝達が行なわれます。オランダ東インド会社の船が実際に来るようになると、オランダ東インド会社の重役も日本への関心は持っていますので、いろいろ情報を集めさせますが、会社はどちらかというと秘密主義で、情報も独占しておきたかったようで、あまり積極的に日本の文化を知らせるという活動はしていません。会社の本は出ていますが、それでも、商館員たちの実際の記録などを入手して、アルノルドゥス・モンターヌス（Arnoldus Montanus）という人がオランダ語で『東インド会社日本遣使録』、日本では『日本誌』という題名で翻訳されていますが、そんな本を書いて、彼はプロテスタントの立場から、オランダの日本との関係について語っています。

先ほど大場先生のお話にあつたように、植物に関する関心は比較的早い時期からあつたようで、17世紀後半のドイツ系の商館長だつたアンドレアス・クライエル（Andreas Cleyer）、その下で働いていたゲ

オルグ・マイステル（Georg Meister）といった人が、日本の植物についての紹介を書籍の形では行っています。こうした段階からさらに進んで、日本についての個人的研究的な関心から日本を紹介した人々もいました。先生方のお話の中で何度か名前が出てきたケンペルとかツェンペリーといった人たちです。

ここではレジメの方に簡単に書いておきましたが、シーボルトと比較になるような日本に来る経緯や、日本での資料の収集法などに限って、少し触れておきたいと思います。最初に日本についての総合的な記述をしたのは、恐らくケンペルだろうといわれます。ケンペルという人は若いときから旅をしていて、非常に面白いことに、ドイツ人であるにもかかわらず、スウェーデンからペルシャへの使節のメンバーとして、ロシア経由でイスファハンまで来ているという経歴の持ち主です。それでももっと遠くまで行きたいということで、オランダ東インド会社の医師になって、最後は日本までやって来ました。1690年から2年ほど日本にいます。彼は当時、正式の通詞ではなくて、オランダ人のそばで、さまざまな用事をこなして手数料を得ているような内通詞の家の生まれの今村源右衛門という人にオランダ語を教え、非常に優秀だったので、彼からさまざまな情報を教えてもらったり、本を調達してもらったりということをしたとケンペルは書いています。ケンペルが残したスケッチやメモの中には、源右衛門から得た片仮名や漢字などの情報が入っています。

ケンペルは帰国後、日本についての本を書こうと一生懸命になりますが、最終的に1冊、『廻国奇観』という彼の旅した世界についての本を出しただけで、日本についての記述は本にしないうちに亡くなってしまいました。1720年代になってから、後で彼の遺稿を基に、最初に英語版、それからドイツ語版の『日本誌』が出されます。ただ、このケンペルの日本研究はそれまでに比べるとかなり総合的なものであって、ヨーロッパでベストセラーになって、18世紀のヨー

ロッパに大きな影響を与えたといわれます。ペリーが日本に来航するときも、最新のシーボルトの著作とともに、ケンペルは持ってきたといわれますし、日本にも輸入されて、一部ですが、日本人が訳そうともしています。

ツェンペリーについて言いますと、植物学者ということで、彼の日本についての記述は、大場先生のお話にも少しありましたように、自然科学的な視点を含んでいるという点で注目されると思います。ツェンペリーが日本の長崎に到着したのは、ちょうど日本では『解体新書』が刊行された翌年でした。彼は日本の出島の通詞たちについても、かなりオランダ語が分かったり、洋書を非常に愛好していて、いろいろな質問をしてくと評価していますし、江戸に行ったときには、『解体新書』にも関わった桂川甫周や中川順庵が毎日のようにやって来て、この2人のことを「愛弟子」と呼んでいます。オランダ語である程度話が伝わる。それからツェンペリーが植物について関心があると、植物を持ってきてくれる、またそれを見せ合って、「これは日本語では何という名前」「オランダ語やラテン語では何という名前」といった学問的な交流ができたということです。

ツェンペリーはスウェーデン人なのですが、実はオランダ人はどちらかというと商売中心で、あまり日本学というか、日本の研究に関心がない方が多かったのです。ただ、商館長のイザーク・ティツィング (Isaac Titsingh) という人は、日本に関する記述をしようと非常に努力をしました。ティツィングはツェンペリーの10年ほど後に日本にやって来て、優秀な商館長だったようで、後にはベンガル長官になり、さらに北京への使節を務めた後、帰国します。日本にいた間に、例えば江戸参府に行ったときには、蘭癖大名として有名な福知山の朽木昌綱や、ツェンペリーとも交渉のあった桂川甫周、中川順庵などと交際しています。ティツィングは日常業務での接触を超えて、通詞たちに熱心にオランダ語を教えたとい

われ、情報源としての書籍の入手や、特に特徴的なものが、これを翻訳してくれ、あれを翻訳してくれということを随分頼んでいるわけです。日本を離れた後も、何人かの人たちと文通をしていて、そこであの翻訳はどうなったという催促をしたりしています。つまり、18世紀後半になると、蘭学者や通詞の一部が、日本の情報をオランダ語訳することを、正確であったかどうかは分かりませんが、頼めるくらいのレベルに到達していたことが分かります。こうした日本に関する研究と、それに応える日本の通詞や蘭学者、いわば蘭学と日本学の相互作用が蓄積されてきた。そういう17世紀の終わりから18世紀の状況を、シーボルトの活動の一つの前提と捉えることができるのではないかと思います。

3. シーボルトの時代

一方でシーボルトが来日した時期は、江戸時代の日本とオランダの関係の中でも大きな変化の時期であったことも確かです。アジアでは18世紀を通して次第にイギリスの勢力が増し、インドにおける領土支配や、中国・インド間の交易、さらに広東での中国茶のヨーロッパへの輸出など、独占を進めていくようになります。また、太平洋を横断する航路が開拓され、北太平洋の沿岸で入手した毛皮を中国に売り込もうということで、ロシアやアメリカも動き出す。それから、日本を見る目も、北太平洋から中国、インドまでつながる大きな交易網の中で、新たな見方をされるようになっていくという背景があります。

ところが、特許会社である連合オランダ東インド会社は、アジアで日本との貿易を独占的に行っていたわけですが、17世紀後半をピークに次第にその業績が悪化していきます。理由としてはさまざまありますが、1799年には、ついに会社は解散することになってしまいます。会社の事業および負債を含む資

産は全て、オランダの国家が引き継ぐことになったわけですが、そのオランダ共和国も17世紀の黄金の時代を経て、18世紀には次第に弱体化する。最後はフランス革命に端を発するヨーロッパの動乱の中で、なくなってしまいます。

国内では、オラニエ家や都市の貴族層、有力門閥貴族層に反発するような愛国者運動が高揚する。そこへフランス革命が起こり、革命軍がオランダ領に侵入する。オランダ総督、オラニエ家のウィレムはイギリスに亡命し、共和国はなくなってしまうという道をたどります。詳細は略年表を付けておきましたので、ご覧ください。1804年にナポレオンがフランス皇帝になると、1806年に弟のルイ・ナポレオンを国王として送り込んで、オランダ王国をつくります。しかし、1810年には完全にそれもフランスに併合されてしまう、こういうヨーロッパの事情はアジア、そして日本にも影響を与えることとなります。

日本側では、先ほど貿易の話をししましたが、銅は産出量が必ずしもどんどん伸びるわけではない。それに対して、国内では貨幣の需要などが増大するという一方で、常に銅の輸出量を減らそうとしています。1790年には、それを最も強硬に実現した半減商売令が出されます。貿易額を半減するとともに、献上品も半分でもいい、そして江戸参府も4年に1回でいいという命令です。

この時期に出島では、運悪くといえますが、1798年にその大半を焼く火災が起こり、同じ年に、商館長ヘイスベルト・ヘンミー（Gijsbert Hemmij）が長崎から江戸へ参府した帰り道、掛川で死亡するという不幸が重なります。バタフィア政庁は、1797年以降は、イギリスによって拿捕されることを恐れて、自前の船を日本に送ることを避け、アメリカやデンマークなど中立国の船を雇って、かろうじて日本との連絡を取っているという状況になります。出島にとっては非常に厳しい時期であったわけです。

一方で、国際情勢の変化を背景にして、皆さん聞

いたことがあることだと思いますが、1804年にはロシアの使節、レザノフがやって来る。それから、1808年にはオランダ船を拿捕しようとして、イギリス船フェートン号が長崎湾に侵入するという事件が起こります。

1803年に商館長になったヘンドリック・ドーフ（Hendrik Doeff）は、正規の後任者が到着しないまま、15年間も商館長として放っておかれるという状況になり、そのうちでも、1810年～1812年は、ついにバタフィアからの船が一隻も来ないというような状況が起こります。

オランダ本国がフランスの支配下に入ると、その機に乗じて、アジアではイギリスがオランダの植民地を奪おうとします。バタフィアは1811年、イギリスに占領されてしまいます。イギリスはバタフィアを占領した後、日本の出島も接収しようということで、ジャワ代理総督のトーマス・ラッフルズ（Thomas Raffles）が1813年、1814年にイギリス船を派遣します。商館長ドーフは接収を拒否し、その船はオランダ船として扱われることとなりますが、この間、出島商館は、本国やバタフィアの状況について十分情報を得られないまま、とにかく今までの立場をキープしようとして、孤軍奮闘していたという状況なわけです。

それに転機が訪れたのが1815年です。いわゆるウィーン会議を経て、オランダ本国の独立が回復する。そして、東インドの、アジアの植民地もイギリスから返還されます。新しく回復したオランダ王国にとっては、戦争によって経済が壊滅的な打撃を受けたので、何とか立て直したいということで、アジアの植民地や貿易を本国経済に貢献させたいと思うわけですが、1796年以降、20年近くもアジアとの連絡が十分に行われていなかったということで、各地の状況について改めて情報を得るところから始めなくてははいけませんでした。その段階で、本国から多数の科学者や画家、調査員がアジアに派遣され、例えば

植民地の住民の状況、有用な貿易の対象、例えば動植物や鉱産物、それから貿易先がどんな状況にあるかといったさまざまな調査が意図されます。未知の土地を研究したいと思っている学者にとっては願ってもないチャンスということで、多くの学者たちが派遣されたわけです。

1817年には、ドゥーフの下でナンバー2として働いていたことのあるヤン・コック＝ブロムホフが新商館長として派遣されます。彼は日本との貿易をもう一度立て直すことに努力するわけですが、その赴任に際し、ちょうど1816年に設立された王立骨董陳列室のために、包括的に日本の物品を収集してくるよう頼まれたといわれます。個人の興味に基づく収集とは異なる収集という発想が出てきたわけです。実際、ブロムホフは大工道具や出島の模型など、現在もオランダに残っているようなコレクションをオランダに送っています。



ブロムホフはさらに、シーボルトに先駆けて、種痘の技術の移転や、温度や気象の観測などにも着手しているということで、ちょうど時期的にそうしたものが求められていたということが言えると思います。

日本の貿易を続けるためにも、その国の状況や産物や文化についての情報を集めておくことは得策だと考えられ、趣味の異国の品というだけでなく、民俗学や自然史に関する物品の収集への体系的な取り組みへの変化の兆しが見られるようになってきました。

こうした背景の中でシーボルトが登場することになるわけです。

4. シーボルトの来日と活動

	一回目の滞在	二回目の滞在
時期	文政六～十二年 (1823～1829)	安政六～文久二年 (1859～1862)
立場	東インド政庁管下の 日本商館の医師 (調査の任務)	幕府の顧問 (オランダ貿易会社顧問)
旅	通常の江戸参府	長崎から横浜まで船

最初の日高先生のご説明の中にもあったように、シーボルトは2度にわたって来日しています。私自身はブロムホフとの関係など、1回目の滞在中を中心に勉強してきたのですが、2度の日本滞在中の異なる環境については、一度きちんと認識しておくことが必要だと思います。つまり、1度目の滞在中は出島オランダ商館の医師として、そして今、申し上げたような背景の中で、日本についての調査の任務を持って、シーボルトはやって来ました。その活動には商館からの支援もあり、また、江戸参府という定例行事に随行することで、江戸までの旅を行っています。

2度目の滞在中は、開国後の日本との貿易を担ったオランダ貿易会社の顧問として来日します。滞在中に任期が切れると、幕府の顧問という形で江戸に滞在しますし、江戸への旅は長崎から横浜まで船で行ってしまいます。このように時期や立場の違いはもちろん行動の範囲等にも関わりますし、江戸への旅の様子も異なる。恐らくコレクションを考える上でも、そうした違いは考えておく必要があるのではないかと思います。

シーボルトに戻りますと、ヴェルツブルク大学で医学や自然科学を学んだ後、軍医としてオランダで勤務に就いて、アジアの植民地に行くことを決心します。学問的に未知の土地で研究したいという目的だったと思われませんが、医師として、バタフィアをはじめとするアジアに赴くというのは、彼ばかりではなく、同級生の中に何人か、バタフィアでお医者さんになっている人がいます。シーボルトはおじいさん以来の名門ですから、いろいろコネもあったりして、オランダ領東インド陸軍の外科軍医少佐という地位を得ることができたのでしょう。秀才とはいえ、26歳の駆け出しのお医者さんにとってはなかなか破格の待遇だったようで、それを得て、1822年にオランダを出発して、1823年の初めにバタフィアに到着します。

バタフィアに到着した後、出島商館の医師としての日本での勤務を命じられ、そこで日本という研究対象が初めて明確に定まったものと思われれます。総督だったファン・デル・カペレン (van der Capellen) は学問にも関心が深く、シーボルトに非常に期待していたようで、援助を惜しみませんでした。彼には、日本における博物学研究という任務が与えられたわけですが、その主たる中身は、先ほどの大場先生のお話にもありましたように、日本産の植物の種子や生きた生体をバタフィアのバイテンゾルフ植物園に送り、さらにオランダに送る、また、動植物の標本を作製して、本国の博物館に送るといったことだったわけです。その限りでも、総督府は彼に対してかなりの資金を投じており、お給料の他に報奨金も出していますし、必要経費もある程度認めています。また、バタフィアの倉庫から、いろいろな医学だけではなく化学実験の道具なども出したりしています。

シーボルトの商館付きの医師という職務は、本来は商館の駐在員の健康維持のためのものですが、シーボルトはその博物学的な調査に役立てるために、

日本人に対して積極的な医療行為を行います。種痘のワクチンを試みるというようなことから始まり、教育なども行っています。日本滞在が長かった前任の商館長ブロムホフは、これまで培ってきた人脈を生かして、美馬順三、湊長安、高良斎、二宮敬作といった主だった門人となる人々をシーボルトに紹介しています。シーボルトは着いた年の秋には、もうオランダ語で博物学や医学を教え始めていますし、翌年には長崎市中の医者私塾に出張して、医学の実地教育を行う、さらに鳴滝でも診療と教育を行うことが認められています。調査を円滑に進めるために、実用的で効果が目に見えやすい医療を武器として、商館を挙げてシーボルトを売り込んでいくような体制があったわけです。

シーボルトが最初に手掛けたのは、当初よりの使命であり関心事でもあった博物学的な調査、動植物や鉱物などの収集・研究でしたが、さらに彼は自分の任務を拡大・発展させようと熱心に運動します。1826年が、彼が来日して以降、最初の江戸参府というタイミングになるわけですが、そのチャンスに幕府に江戸への長期滞在を認めさせて、日本について総合的な調査を展開するという大計画を立て、バタフィアの政庁に対して承認と財政措置を求めています。それに応える形で総督府は江戸滞在計画を認め、博物学的調査に加えて、言語、地理、統治形態、歴史、宗教、芸術、学問などの全領域について、全般的な学術調査を命じています。調査のために、バタフィアから画家や助手としてのカレル・ヒュベルト・ドゥ・フィレニューフェ (Carel Hubert de Villeneuve) やハインリヒ・ビュルゲル (Heinrich Bürger) といった人たちも派遣されます。

蘭学が発展してという話を先ほど申し上げましたが、オランダ語で彼と学問的な話ができるような人々が既において、その人たちは彼が持つ医学を中心とする西洋の学問の伝授を非常に望んでいました。シーボルトと関わった日本人として、呉秀三さんという最

初のシーボルトの評伝を書かれた方は、117人という大勢の人物の名前を挙げています。交際の実態は非常にさまざまですが、彼は医療や教育を通じて、患者も含めてさまざまな人たちから直接・間接に情報や仲介など、いろいろな便宜を期待できるような環境をつくり出すことができたわけです。その中でも中心になったのは、もちろん長崎で教えを受けた門人たちだったと思います。彼らのほとんど全てが、既に医者や蘭学者として経験や知識を持った人たちでした。長崎に学問をしに行くということは、シーボルトの来日以前から、多くの蘭学者たちが行ってきましたが、それまでオランダ側は、そういう人たちを積極的・自覚的に教育するというのを、少なくとも組織的には全く行っていませんでした。シーボルトはそれを行ったわけで、さらに、関心に沿ったテーマで、門人や知人たちにオランダ語で論文を執筆することを依頼します。テーマは非常にたくさんあり、その中でも美馬順三が書いた日本古代史や、高野長英の書いたお茶の栽培や『南島志』などの記述は、後にシーボルトが『日本』を執筆する際、主要な材料になったといわれています。

ボーフム・ルール大学が所蔵しているコレクションの中には、たくさんの弟子たちのオランダ語論文があります。中身のオランダ語のレベルはさまざまだったようですが、こうした情報収集ができる状況にあったわけです。論文ばかりではなく、書籍、動植物や鉱物の標本、あるいは民具、工芸品、諸国の産物などが、彼の依頼によって、あるいは贈り物という形で彼ののもとに集まってきました。その一方で、シーボルトは特に民族学的といわれるような民具や工芸品、諸国の産物等に関しては、かなりの部分を自腹で購入しています。

最も重要な購入の機会が江戸参府であるということは、参府の記述からも垣間見えます。それは必ずしもシーボルトだけではなく、プロムホフや、同じ時期にコレクションを形成したオーフェルメール＝

フィッセルなどについてもそうですが、江戸参府がお買い物の重要な機会になったことは間違いありません。

参府途上の買物の例	
・コック＝プロムホフ	鳴海(有松):布 / 大坂:植物 etc. 大森・水口の麦藁細工、箱根の寄木細工、赤間の石製品
・オーフェルメール＝フィッセル	宮:鉄器 駿河府中:籠細工、轆轤細工、漆細工、竹/木工品 →価格で折り合わず 箱根:籠・漆細工「値段は府中より正当」
・シーボルト	われわれは早い時間に府中につき、全国的に有名な編細工や木工品を買い求めた。

今回、ご一緒にやったプロジェクトで、マティ・フォラーさんは、プロムホフのコレクションの目録と江戸参府の記録、さらに産地に残る品物の実物を見ることで、具体的にどういうものをどこで買ったのかという検討をかなり進めておられます。今、ここに出したのは、それぞれの参府に関する記述の中で、どこで何を買ったという一端がいろいろ出てくることをお示したもので、他にもたくさん記述があります。先ほどの植物との関わりで言うと、例えば大坂や京都は、大名や金持ちのお屋敷の庭を造るということで、日本でも植木屋が当時かなり繁昌していて、ネットワークもできているので、行きに例えば大坂で植物をこれが欲しいのだと言って頼むと、参府の帰り道に立ち寄ったときにはもう準備されていたり、あるいは手回しよく「もう長崎に送っておいたから」というようなことが書かれていたりします。

それとともに、江戸参府というのは、江戸に行くから長崎とは全然別かということ、そんなことはなくて、通詞だけではなく、長崎でオランダ人と直接接点を持っていた諸色売込人や内通詞小頭、またその下にいる部屋付きの召使的な人たちといった日常的に知っている労働力が従者としてかなり参加しており、日常的な関係の延長の中で、さまざまなものを頼ん

だり、細かい注文をしたりすることが可能になったのだろうと推測できます。

金銭面では、先に触れた個人貿易がその財源の一部を成していました。また、入手経路の上でも、個人貿易の商品供給の担い手が、収集にも役割を果たしているものと思われます。私がやっております日蘭関係史の主要な史料である出島の日本商館の公的な記録は、その性格上、個人的な取引、個人貿易に関する情報はほとんど含んでいません。そのため、個人の取引の実態解明は、これまでほとんど進んでいなかったのですが、今回のプロジェクトの中で、ボーフム大学やブランデンシュタイン家の史料を拝見することで、個人の文書類の中の私的な取引に関わる史料の分析を若干なりともすることができました。シーボルトの個人貿易について、多少具体的なことが分かってきたとともに、それはシーボルト個人だけではなくて、オランダの取引の中でも具体的な例として非常に貴重です。

あまり時間がないのですが、幾つか例を紹介すると、「シーボルト注文物渡帳」と書いてあり、出島の日用品とともにさまざまな注文品の供給も取り仕切っている諸色売込人が、シーボルトに対して、これとこれとこれを渡したというようなことが書かれたリストがボーフムに1冊ありました。

下のところに、compradoor と書かれ仲間の印が押してあるということで、諸色売込人のものだということが分かります。これが長崎会所を通じて決済される脇荷取引の具体的な内容ということになると思います。

一方、ブランデンシュタイン家の史料の中には、幾つかの金銭出納簿や当座勘定帳があります。シーボルト自身が付けていたお金の出入りの帳簿が、完璧ではありませんが、残っています。

金銭出納簿の記載より①			
Sample: 稲部市五郎Tolk Inabe Itsikaro (K8.Fa.c.104)			
•Debit			
Content ter leen gegeven	現銀貸付	T. 271.5	
Für medicynen hem uit Batavia ontboden	薬品	T. 346.0	
Aan Arak, Genever, Glaswerk	酒類・ガラス器	<u>T. 130.0</u>	
		T.747.5	
Diverse Japansche Goederen en contanten by hem in bewaring gegeven彼が預かる日本の諸品と現銀			T.704.5
•Credit			
De som van T.747 aan den tolk Itsikaro bewaard ten diensten van <u>myne kind Oine</u> , zal hiermede de ondergeteekende aan de kinderen van den voormelden Inabe Itsigoero tot geschenk overlaten.			
Dr. v. Siebold			
お稲のために預けてあった→市五郎の子供たちに贈る			

それを見ますと、例えばお酒のガラス器などを売ったとか、薬品を売ったという記述もありますが、その他に、例えばウェイランドの辞書を売った、その代わり、大工道具や男女のかつらなどを手に入れたという、手に入れるはずだったというのもあるのですが、そういうことが記述されています。そして相手はtolk（通詞）であったり、使用人と書かれている人もいますが、身の回りに出入りするような人々との間で手に入れていたのです。

金銭出納簿の記述より②		
• 立石秀太郎Tolk Hidetaro (K8. Fa.f.194)		
D: Aan diverse Negotie goederen	etc.	
様々な商品のために		
C: 25 Kobang Sonogi vader	etc.	
其扇の父へ小判25枚		
• 吉雄忠次郎Tolk Tsoesiro (K8.Fa.c.104)		
D: Voor diverse goederen hem overgedaan	品物を預ける	
Een stel Weiland Woorden boek	ウェイランド辞書	etc.
C: Timmermans gereedschappen	大工の道具	
Een stel man en vrouw paranck	男女の髪	etc.
(Fa.f.194によればnog niet ontvangen未受領、verloren損失)		

ここには北斎の絵なんていうのが書いてあって少し注目されるのですが、そうした種々のものを身の回りの人たちを通じて、これは貿易というよりむしろもっと私的な交換のやりとりの中で処理されているようにも見えますが、こうした形で手に入れているということが分かるわけです。

金銭出納簿の記述より③

- 使用人トダDienaar Toda(菊谷藤太)
(K8.Fa.c.104)
- D: Heelkundige instrumenten外科道具 T.158
- C: Elf schilderijen van Hoksai 北斎の絵11枚 T.75
- Munten 古銭 T. 6.5

Zijn nog verscheidene schilderijen bey hem
bewaard daarvan draagt Kesak kennis.

2回目の来日の際のコレクションについては、今のところまだ、植物の輸送に関する伝票などが出てきたりしているのを確認しただけですが、まだまだいろいろな史料があるものと期待されます。

5. 終わりに

「シーボルトの位置」というタイトルを掲げましたが、1回目の来日について言えば、活動は個人としてのシーボルトのものであるとともに、1820年代という時代を背景としつつ、江戸時代の日蘭関係の枠組みの中で、交流の現場にいた人たち、双方のさまざまな関心や力量の蓄積の上に成り立っている、いわば近世的な日蘭関係の集大成とすることができるのではないかと思います。

今後の期待としては、2度目の来日についても、コレクション形成に関わる情報などはまだまだこれからだと思いますので、文献史料と組み合わせたコレクションの検討によってそれらが解明されていくこと、そして、アレクサンダーやハインリヒについての検討が進められることで、近世から近代という日本の歴史の移り変わりの中で、親子にわたって異文化の接点に立った人たちの姿をより豊かに描くことができるのではないかと。そんな期待をお伝えして、私の今日のお話は終わらせていただこうと思います。ご

清聴ありがとうございました（拍手）。

(司会) 松井先生、どうもありがとうございました。
これより休憩に入ります。

シーボルト研究の現状とこれから

司会…………… 国立歴史民俗博物館教授 大久保純一氏

パネリスト…………… ボン大学名誉教授 ヨーゼフ・クライナー氏
法政大学国際日本学研究所客員所員

東京大学名誉教授 大場 秀章氏
東京大学史料編纂所教授 松井 洋子氏
国立歴史民俗博物館教授 日高 薫氏

(司会) それでは再開します。パネルディスカッション「シーボルト研究の現状とこれから」です。パネリストは、今日ご講演いただきました3先生と、日高教授の4名でお願いします。司会は、国立歴史民俗博物館教授の大久保純一先生、よろしくお願います。

(大久保) 司会の大久保です。時間も押していますので、早速パネルディスカッションに入らせていただきたいと思います。その前に、既にフロアの方から頂いているご質問用紙について、お答えできる範囲で、各発表者の先生方から最初にお答えいただきたいと思います。

フロアからの質問への回答

(日高) 「今回の人間文化研究機構の調査では、保存対策を行われたのか」というご質問がありました。特に個人所蔵資料についてと書いておられますが、修復などは行っておりません。保存対策は、いろいろな保存状態の史料があります。特に個人所蔵のものについては、こちらの方からアドバイス等をさせていただいて、例えばいろいろな下絵類や文書類がそのまま生の形で重なっていたりするものについては、中性紙の封筒に入れて分類をするなど、保管法についても、所蔵者のご意向と折り合いをつけながら、助言させていただく形を取っています。また、博物館等については、担当の学芸員、あるいは保存担当

者と話をしながら進めてきました。

4月から始まる新しいプロジェクトでは、歴博には自然科学系の分析をやりながら、保存科学にも目配りをしている教員がいますので、新たにそういう人にも入ってもらい、相手方と話し合いや共同の研究を予定しています。



(クライナー) 同じ方から私にもご質問を頂いております。「ドイツではシーボルトへの関心はどの程度か」という質問です。ドイツでシーボルトが注目されるようになったのは、昭和初め、アルベルト・アインシュタイン (Albert Einstein) とフリッツ・ハーバー (Fritz Haber) の2人のノーベル賞受賞者と、日本側は星一 (ほしはじめ) という企業家の寄付によって、ベルリンで日本研究所ができた頃です。その日本研究所で、1932年に、出版百周年記念としてシーボルトの著書『Nippon』の再版が行われました。それ以来ずっとシーボルトに対する学問的な調査研究が続いています。一般には現在、シーボルトと長男のアレクサンダーが生まれたヴェルツブルクという町にあるシーボルト協会が予算を集めて私立の博物館をつくり、ヴェルツブルク市からアレクサンダ

一の日本関係コレクションを委託されて、そこで展示をしており、毎年、研究会や講演会が行われています。シーボルト生誕200年のときに、日本郵便とドイツ郵政と一緒にシーボルトの記念切手を発行したことが注目されました。簡単ですが、これがお答えになるのではないかと思います。

もう一つ頂いたご質問は、「シーボルトやその他の外国人が幕末から明治にかけて、海外に持ち出した日本の小袖、着物、その他の衣類についてなるべく多く知りたい。写真資料が見たいが、カタログなどがあったら教えてほしい」というご質問です。

少し時代をさかのぼりますが、オランダ東インド会社は毎年、江戸参府で長崎から江戸に上がって、將軍の謁見を受けたのですが、その謁見のときに將軍から毎年30枚の着物を頂いています。また、江戸に滞在する間に、大名や旗本からも何枚かの着物を頂きました。例えば、ケンペルの元禄時代の記録によると、毎年約120枚の着物を長崎に持ち帰りました。その中から一番良いものを選んで、長崎代官にお土産として差し上げる。今だったら、これは政治的な問題になりますね（笑）。二番目にいいと思ったものはバタヴィアの総督に贈り、三番目か四番目はオランダの王様がもらいます。先ほど写真でお見せした通りです。

そういうたくさんの着物が毎年ヨーロッパに渡ったにもかかわらず、ヨーロッパでは、それらが毎日の生活でガウンとして使われていたので、残っていません。残っているのは二枚だけで、一枚はアムステルダム国立博物館（Rijksmuseum Amsterdam）にあります。日本の観光客の皆さんはレンブラントの「夜警」を見に二階に上がるのですが、階段で半地下に降りないとその着物は見られません。もう一枚はオランダの地方の博物館で保管されています。シーボルト時代には、ヨーロッパでの着物ブームはもう収まっていたのです。既に着物はヨーロッパのガウンになってしまっていて、インド製や地元ヨー

ロッパ製のガウンになっていたもので、着物を持って帰っても、それほど金になりませんでした。

シーボルトが持って帰ったのは反物です。着物を持って帰るのは明治に入ってからで、今一番注目されているのは、明治初めのいわゆる琉球処分に伴って、ドイツ政府が約500点に上る琉球の王朝時代の着物を含む衣類などを購入しました。それは現在、那覇の首里城公園管理財団が調査して、2年前に調査結果を報告書に纏めました。沖縄県立芸術大学名誉教授祝嶺恭子による優れた研究で、この研究結果を踏まえて着物を復元しました。銀座の和光で展示されたこともあります。ただ、この沖縄の出版物以外にカタログなどは出版されていないと思います。

三つ目のご質問は、シーボルトが高橋景保の作成した日本地図を持ち帰ろうとした問題、いわゆるシーボルト事件に関連したご質問だと思いますが、私見を申しますと、シーボルトは単なる学術的な興味に燃えた人で、あらゆるものを集めて、手に入れたい。もちろん地図は重要度第1の資料ですが、スパイ行動といったことは、シーボルトは何も考えていません。ただ無茶苦茶に物を集めたら、その中には危険を伴う、政治的な意味合いの深いものもあったと、自分でも気が付いたかもしれませんが、それでも集めていました。

特に北海道の問題です。北方から帝政ロシアがだんだん南下してきたので、日本地図を渡した協力者・高橋景保は裁判にかけられ、獄中で亡くなったのですが、シーボルトも国外追放という厳しい処分を受けました。確かにその地図は非常に細かく書いてありました。あの裁判も、当時の日本人が書いていますが、鎖国か開国かの問題があって、ケンペル来日以降は細かい日本地図が外国に流れていて、今は鎖国する意味もないのだから、開国してもいいではないかという意見もありました。

最後のご質問は、「シーボルトがウィーンに寄贈したアイヌの資料の中に、上原熊次郎の『蝦夷方言藻

汐草』というアイヌ語辞書がありますが、シーボルトは江戸時代にあつて、民族学的な、あるいは人類学的な関心で、アイヌの人たちに注目していた可能性はありますか」というものです。はい、大いにあります。当時はいわゆる自然人類学はまだそれほど発展していなかったのです。アイヌがどういう人種とか、後に明治時代に入って、アイヌは白人系ではないかとか、旧ヨーロッパ系統の人種だとか言われますが、そういうことは、当時は、一切まだなかったのです。日本が非常に高度に分化された仕事や文化を持っていたのに対し、アイヌはまだ栽培文化でもなく、本当に狩猟や漁師文化が中心で、自然と一体化した生活を営んでいました。シーボルトは単に、日本とは全く違うアイヌの生活スタイルに、非常に興味があったのだと思います。そして、シーボルトの調査では、アイヌはもともとアジア大陸から北海道（蝦夷）に渡り、到着したという結論を出しています。結局、アイヌは非常に古い民族で、アジア大陸で何万年の歴史があるとシーボルトは言っています。

それでアイヌ関係のものを日本の北方探検者から手に入れ、アイヌ語辞書をウィーンに寄贈して、アウグスト・プフィッツマイヤーがそれを独訳しました。それはヨーロッパにおけるアイヌ研究の一つの出発点にもなりました。それ以来、ヨーロッパではアイヌ人に対する興味が非常に高く、日本人には考えられないほど注目されています。一つの例を申し上げますと、EUの首都ブリュッセルでは、2年おきにEuropalia（ユーロパリア）という大掛かりなフェスティバルが催されていますが、バブル経済のときには、日本も招待され、日本固有の文化を紹介しています。そのときは、日本は東京国立博物館の展示をはじめ、歌舞伎、能、雅楽等の催しもたくさん持っていきました。ところがヨーロッパ側は、そのプログラムを見て、アイヌが入っていないというので、ベルギーがお金を出してアイヌの特別展示を催しました。ですから、これからアイヌの国立博物館が日本にでき

ることは、ヨーロッパの人達も非常にうれしく思っています。

以上が私が頂いた質問です。長くなりまして、失礼しました。

(大場) 幾つか質問がありますが、その中には既に私、あるいは松井先生がお話したこともあるので、そういうものは省略していききたいと思います。

まず、「シーボルトは日本以外、中国、東南アジアのインドの植物にも関心を持ち、コレクションなどあるのでしょうか。また、日本以外の植物研究者とシーボルトの交流は」という質問ですが、標本で見える限り、東インド政庁の置かれたジャヴァ以外の地域で採集された標本はなさそうです。シーボルトが日本以外のアジア諸国で採集した標本はありません。恐らくシーボルトは、関心はともかくとして、現実には日本の植物だけに注意を集中して、標本や生きた植物個体や種子などを集めたように思われます。日本の植物は、シーボルトが日本から帰国して後、明治になる前にロシアのカール・ヨハン・マキシモヴィッチ（Carl Johann Maximowicz）など、オランダ以外の国々の植物学者も研究を開始しているので、当然シーボルトの研究はそれらの方々の先行研究として重要な意味を持っていました。なので、シーボルトはたくさんの書簡を頂いて、それに返事を書いたことが知られています。

次に「大シーボルトが日本に来た目的は何ですか。プラントハンターなのか、医者なのか」という質問です。これは既に説明したとおり、表向き、すなわち対日的の任務は医師であり、東インド政庁側からすれば、同時に日本の博物資源等の調査も任務の一部であったのです。

「シーボルトが日本に滞在した期間は何年ですか」という質問ですが、これは1823～1829年に当たります。

「シーボルトの本国帰国後の職業は何ですか」とい

う質問です。日本に来たときには東インド陸軍少佐でしたが、帰国してその身分はオランダ本国の陸軍少佐になり、陸軍大佐で退職したと記憶しています。ですから、公務としては軍人であったといっよいでしょう。オランダへの帰国後シーボルトはオランダ政府よりオランダ東インド陸軍参謀部付を命ぜられ、日本関係業務を囑託されていました。

「シーボルトの出身階級は何ですか」という質問ですが、貴族の出身で、日本滞在初期からフォン・シーボルトと署名しています。フォン(von)は貴族を示す表示です。

「鎖国前、イギリスは日本にやって来たと思います。イギリスはそのとき、日本の植物・動物等を持ち帰っていなかったのでしょうか、日本への関心はその分野ではなかったのでしょうか」。私自身は詳しくは研究していませんが、イギリス人を含む東アジアにおける植物の調査に関しては、江戸末期から明治初めにかけて北京のロシア公使館に勤務していた、エミール・ブレットシュナイダー(Emil Bretschneider)が詳しく調べています。ブレットシュナイダーの記録を見る限り、江戸末期までイギリスが日本へ植物調査のために植物学者等を派遣したということはないように思われます。



「シーボルトが乗ってきた船はどんな船でしょうか。植物はその船の中で、どのように枯れないように管理されていたのでしょうか」という質問です。船のことは既に話にありましたが、植物は、最初の輸出のときには具体的にどのような方法で植物を運ぶかに

関しては、あまり知識がなく、鉢植えにされたまま甲板に乗せ、幕を被せて運んでいったようです。2回目以降は、ワーディアンボックスといって、板囲いがされて、天井が斜めになっていて、天気がいい日はそれを開けて外気を入れたり、光を当てたりできる箱の中に植物を入れて運んだようです。この特殊な容器はイギリスで開発され、当時広く用いられていたと書かれています。ちなみにイギリス人は日本には来なかったのですが、イギリスには古くから日本の植物が渡っています。それは、私の話の中でも申し上げましたように、広東を経由して、イギリスに運ばれたものだと思います。広東-日本間、日本と中国の沿岸部は船を使えばそれほど行き来するのが難しい距離ではないので、交流はあったようです。

どうやって運んだかという点、今でも五島列島では植物の移送に使っているらしいのですが、桶や樽に植物を入れて船に乗せて運びます。多分、生きた植物を入れた桶や樽を甲板なり、船底なりに乗せて運ぶ方法が取られたのではないかと想像しています。具体的に証明するものはまだありませんが、そういう方法があったかと思えます。

「シーボルトはコーヒーを飲んでいたのでしょか。主にお茶でしたか」という質問です。そう期待する面もありますが、多分、ワインを飲んでいたのでないかと思えます。松井先生に伺いましたら、コーヒーも飲んでいたようですが、私自身は詳しく知りません。

「帰国後の経済的基盤は何だったのでしょうか」という質問です。これに関しては、松井先生にお答えいただくのがよろしいのかと思うのですが、シーボルトは金策に苦労しています。私の知っている範囲でのことですが、その主な原因は、出版にありました。シーボルトの報告書等の大半はシーボルト邸に付設された印刷工房や技術に優れた外部の工房で行われたようです。カラー図版をたくさん収載した『日本植物誌』は、石版多色刷りを採用していたためとく

に多額の経費がかかりました。この印刷は浮世絵のように主要な色毎に版を作り、重ね刷りをしたものです。シーボルトのこれらの本は個人出版であり、そのための製作経費はシーボルト自身が支出したのです。私の知る限りでは、シーボルトは、『日本植物誌』を買ってもらうために、わざわざサンクトペテルブルクまで出かけ、ロシア王室にその購入を求めたといわれています。

「長崎の出島商館跡の発掘で、大量の焼き物の植木鉢が出たそうですが、これはやはり植物の輸出に関連があるのでしょうか」。シーボルトは、オランダに送る前に多くの植物をいったん出島に集め、それを船積みしています。彼自身の言葉によれば、出島の中に植物園を設けて、そこで栽培したと書いています。確かに出島の図を見ると、片隅にまとまって空き地らしい所があって、ここが植物園と思われるのですが、多分そういう場所に集めて植えたのだらうと思います。先述のとおり、輸出に際してはワーディアンボックスを使い、栽培していたときに用いた鉢は恐らく使わなかったでしょうから、そういうものが捨てられた可能性があるので、大量に出土した植木鉢の破片は、その時のものであった可能性があると思います。

「日本の固有の植物をオランダはじめヨーロッパに伝えましたが、彼の地で品種改良され日本に逆輸入された植物もかなりあるのでしょうか」。ご承知のようにオランダはアメリカなどと並んで園芸大国で、園芸産業が盛んです。オランダで行われている品種改良の中心になっている植物はチューリップ、ユリ、そしてアジサイです。チューリップは、カルロス・クレシウス（Carolus Clusius）というオランダ出身の医者兼植物学者が、ウィーンの宮廷植物園に勤務している時に会ったチューリップを帰国時に持帰り、ライデンで栽培しヨーロッパ中に広め、これを核にチューリップの品種改良が進められたのでした。

残りの二つ、アジサイとユリはもちろんシーボルトのコレクションが中心になっています。オランダ

はシーボルトの植物コレクションを大いに利用して、品種改良を進めたと言っているかと思います。加えて言うならば、モミジやギボウシなどもあります。

ヨーロッパの自然の山林には、赤く紅葉する木がほとんどないので、秋の落葉前に真っ赤に紅葉する日本のモミジは、とても重要な観賞木でした。さらに日陰でも育つ植物がヨーロッパには少なかったので、シーボルトが導入したギボウシの仲間やヤブランなどにも人気が集りました。

シーボルトらにより日本から導入されたアジサイ、ユリの改良が進められます。私たちの知っているものでは、例えばカサブランカというユリがありますが、あれは日本のヤマユリとカノコユリやテッポウユリを掛け合わせて作られたもので、そういう交配によって生み出された園芸品種がオランダ、またはオランダからアメリカに出ていたり、いろいろな所でさらに改良されて日本に逆輸入されています。

アジサイは日本では梅雨のころに咲く小低木ですが、最近の若い人たちに聞くと、名前もアジサイではなくハイドランジェアと呼ばれ、鉢植えにされ、クリスマス頃に咲く、小ぶりな植物、という印象を抱いているようです。これもオランダで改良され、逆輸入された植物の例に当たると思います。以上です。

(松井) 私からは簡単にお答えしようと思います。一つは、四つの口についての説明が少し分かりにくかったということですが、一口で鎖国と言うのではなくて、対外関係がどう管理されていたのかということで、最近では四つの口と言うようになっています。対馬を介した朝鮮との関係、薩摩を介した琉球との関係は、使節が行き来する通信の関係であり、長崎における中国船やオランダ船との貿易は、国家間の使節のない通商。そして松前を介した蝦夷地、アイヌ民族との関係は、撫育という国家を持たない相手との関係であるということです。実は日本史の研究、江戸時代の研究の中では、最近ではこういう四つの

口における対外関係という見方が主流になっており、歴博の常設展示の「近世」は、そうした見方に従って、それぞれ四つの口について具体的な対外関係の展示をしていますので、ぜひ一度お運びいただければ、より詳しくお分かりいただけたと思います。

あと質問いただいたのは、オランダ商館やオランダ船についてのことです。簡単に申し上げますと、オランダ船は年1回やって来ます。どういう船があったかという質問がありましたが、主に3本マストの帆船です。つまり風の力で動くもので、ジャカルタからですから、南の季節風がなければ日本には来られないので、年に1回になります。貿易はもうかったのかというご質問もありまして、これは実は簡単そうでなかなか難しいのですが、日本側にしてみれば、オランダから持ってきたものをオランダから買って、日本国内に転売するときには、その差額が当然出るので、長崎会所はそこで収益を得ることになります。オランダ側にとって、日本貿易がどういう意味を持ったか、もうかったかという点、最初の段階、17世紀の段階では、日本は金銀島と言われていたこともあり、日本から持ち出した金や銀をよそに持って行って、貨幣に換えたり転売したりすれば、そこで非常に利ざやが稼げる魅力的な場所だったわけで、東インド会社にとって、日本への興味は決して低くはなかったと言えます。

次第に金銀から銅に変わっていきますが、銅も世界商品であり、アジアの他の場所に持って行って、元手として使う意味では、直接日本貿易で利益が上がったと言っているのかどうか分かりませんが、東インド会社の取引全体の中では、十分に有用なものでした。ただ、18世紀の後半には、会社そのものが先細りになり、その中で日本貿易も参府だ何だと経費ばかりかかって、続けることに意義があるのかという疑問は常に出てきていました。ただ、先ほども申し上げたように、個人貿易でおいしいことをしている人も中にはいるので、ではやめようとするにはいかなかったのも事実です。

シーボルト研究の現状とこれから

(大久保) ありがとうございます。各先生に大変丁寧にお答えいただきましたので、残り時間が10分を切ってしまいました。本来であれば、ディスカッションテーマの「シーボルト研究の現状とこれから」について、活発な議論を頂きたいところですが、時間の関係で厳しいので、一言、今日の他の先生のお話もお聞きになった上で、それぞれの先生方のお立場から、シーボルト研究の現状と今後どうあるべきかについて、簡単にご意見を頂ければと思います。

(クライナー) ありがとうございます。この人間文化研究機構のプロジェクトによって、長年にわたりあまり重視されてこなかったミュンヘンのコレクションの全貌が見えてきたのですが、これからさらに5~6年間、調査研究を続けると、今度はウィーンのヘンリー・コレクションも脚光を浴びようになるのではないかと思います。ただ、私の希望としては、ぜひヴェルツブルクのアレクサンダーコレクションも忘れないでいただきたいということです。ほとんど知られていないし、これこそ最も修復を必要としているコレクションだと思います。文化庁関係者は、「匠プロジェクト」というものを考えています。このプロジェクトは、日本の技術者に長期間ヨーロッパのある場所に滞在してもらい、希望のある博物館から修復が必要な所蔵品を持ってきてもらって、修理してもらおうというものです。具体的な場所としてはフランス、アルザスのコルマルを今考えています。もう建物もできていますし、借りる契約も進んでいると聞いています。ヴェルツブルクのシーボルトコレクションは、第二次大戦の空襲によってだいぶ壊れたものが多く、ミカン箱に詰め込んだ薩摩焼のかけらばかり…といったものもありますが、修復できればぜひお願いしたいと思っています。

(大場) 私の専門は植物学という理科系分野で、先ほ

ど申しあげましたように、シーボルトが採集した標本を改めて同定する研究を、オランダ、ドイツ、日本の研究者と共同で進めています。シーボルトや後継者が収集した植物標本には植物学の立場から未だ未解決の問題があり、今後も研究を続けていきたいと思っ

ているのですが、一刻も早く若い世代の方々に参画していただきたいのです。

また、本日お話をさせていただいたことの多くは園芸に関係するものですが、私の言葉で言えば、園芸は植物を用いた芸術と理解できていると思っています。単に栽培するだけではなく、植物を通して内実のある豊かな生活の実現を図ることもそのひとつですが、絵画や工芸などの芸術、さらに産業に用いて新たな発展を図るなどというのは、単に理学的な問題でもないし、美術工芸的な問題でもなく、人間社会全体にとってそれなりの大きな意義のあることだと思っています。園芸は一方では芸術の問題でもあるので、材料にする植物についてだけ研究すればいいということにはならなくて、美術工芸、あるいは産業等に関する知識を持つ、あるいは研究をしている人たちとともに知見を深めていくことが最も望ましい研究の進め方だと個人的には思っています。しかし、実際にはこのような文理癒合的な研究に意欲を抱く仲間を集めるのはとても難しいのが現状です。それがシーボルトの問題だけではなく、園芸の歴史的な流れ、すなわち園芸史を実証的に研究することを遅らせている大きな原因にもなっているといえます。願わくばシーボルトの研究で、その面白さを少しでも多くの人に知っていただき、歴史民俗博物館などをコアに文理癒合的な研究がさらに進むといいと思っています。

本日はシーボルトの民俗資料、美術コレクションを中心に研究をされている方々との共同シンポジウムでしたが、もちろんシーボルトは植物だけではなく、動物や鉱物のコレクションもたくさん持って帰りました。これらについても分類学的な研究が進められています。文化史系では、先ほどお話がありましたように、ミュンヘンに

ある展示品を中心に、歴博や江戸東京博で展示を行うことが決まっていますが、没150年を記念して、シーボルトの自然史を中心にした展示を、9月13日から12月4日にかけて、上野の国立科学博物館で開催する予定にしています。これは、文化史系の展示に比べるとこぢんまりとした小さな展示ですが、シーボルトが持ち帰ったコレクションの一部、あるいはシーボルトが持ち帰った標本に基づいて、日本の植物、動物、鉱物などを展示し、シーボルトの日本の博物学への貢献を紹介する展示にしたいと考えていますので、どうぞ多くの方々がお誘い合わせの上、博物館にも足を運んでくださいますよう、この場を借りてお願いしたいと思います。

(大久保) 7月から8月は、佐倉の歴博でシーボルト展です。それが終わった直後に、上野の科学博物館でシーボルトの自然史の展示を行います。ぜひ両方足を運んでいただきたいと思います。

(松井) 先ほどドイツではという話がありましたが、日本ではシーボルトは最も有名なドイツ人の一人ではないかというくらい有名で、研究されている方もたくさんいらっしゃると思います。現状という意味でも、非常に細かいところまでよく分かっている部分があって、私自身ももう研究できないのではないかと感じていたところがありましたが、実は資料の幅というか、個人文書や物というふうに視野を広げていきますと、まだまだ分からないこと、知りたいことがたくさんあることが、最近このグループで研究させていただく中で分かってきました。それを一人一人が、例えば私はオランダ語史料、私はドイツ語史料、私は日本語史料、私は物とやっていると、それぞれのところでそれぞれの研究ができるだけになってしまっていますが、こういう大きなプロジェクトでいろいろお声を掛けていただくことで、私も不明で、理科系、植物や鉱物の世界でシーボルトのことをやっていたらっしゃる方がいらっしゃるということは存じ上げなかったのですが、そういうことも含めて研究者が協力することで、

一つこれから新しい世界が見えてくるかと思えます。それはとても期待しているところで、その一歩として展示が行われることも大変期待しています。

ただ、物というのは、私は門外漢ですが、その場所にあるもので、それに支配されている。つまり、別々の博物館にあるものを同時に見るのはなかなか難しく、写真で見るとはいいのですが、デジタル化を強調しておられたようで、そうすることによって、現物ではないけれども最もそれに近いものを比べられたり、並べられたりという、技術の面でも新しい研究のやり方がこれからは出てくるのではないかという気もしています。デジタルには弱いのですが、何とかそういうものにもついていけたらいいなと思っています。

(大久保) 最後に、このプロジェクトの代表である日高さんから、今後の展望も含めて、締めていただきたいと思えます。

(日高) 私自身は美術史で漆の工芸品を担当しているので、ミュンヘンの悉皆調査に関わったのですが、今回歴博で調査対象としたのは、多くの物資料がメインでした。もちろん文献資料の調査もしましたが、一番困ったのが専門分野を調査する人を手配することでした。先ほど分野ごとに写したような漆器や陶磁器は美術史の分野に当たるので、ある程度確保できました。あとは地図やアイヌ関係資料といった、専門の方がおられるものについては、見ていただきました。ただ、専門家はいらっしゃるけれども数が少ししかないものを、日本からわざわざ行ってというと、旅費も掛かりますし、なかなか現実的ではないので、結局、写真を撮って見ていただくという形の調査にならざるを得ませんでした。そうすると、データにどうしても精粗が出てしまい、きちんとした詳しい調書が書けるものと、法量など最低限のものにならざるを得なかったのです。

松井先生がおっしゃったようなネットワークの大切さも考えたのですが、これを解決する方法としては、

現地の人材を育てるしかありません。現地の学生さんなどで今後育っていく人がいれば、日本からわざわざ私たちが行かなくてもできるのではないか。そういうことでこれからは現地のニーズに合ったものを現地の人たちと一緒に考えながら、学生さんに指導していくという方向性も考えています。

もう一つ、代表として今後のアウトプットですが、今まで調査を行うと、調査をしてデータベースを作って、論文を書いたり、シンポジウムで発表したりするのが一般的でした。しかし、歴博では展示という形で一般に公開することを心掛けています。シーボルトの展示のところでご紹介しましたように、シーボルト自身も、物を集めて本を書いただけではなく、展示をしたり、大場先生が言われた通信販売のようなこともされたり、いろいろな方法で日本文化を伝えています。私たちがシーボルト資料を扱うのであれば、展示などを含めたいろいろなアウトプットを考えていきたいと思っています。第3期はウィーンの高インリヒコレクション、あるいはブランデンシュタイン城の文献資料の調査を継続していく予定ですので、また新たな展開があり、このような場でご紹介する機会もあるかと思えますので、楽しみに待っていただければと思います。どうも今日はありがとうございました。

(大久保) 本当はこれから議論が沸騰しなければいけないのですが、残念ながらお時間の関係で、ここで打ち切らざるを得なくなりました。先ほど日高教授がおっしゃいましたように、これから聞けるかと思ったところは、今後の展開に乞うご期待ということで、今日のところはご勘弁いただきたいと思えます。今日は長時間お付き合いいただきまして、先生方、どうもありがとうございました（拍手）。

(司会) ご登壇の先生方、どうもありがとうございました。最後になりますが、国立歴史民俗博物館の久留島浩館長から閉会のご挨拶を申し上げます。

閉会挨拶

国立歴史民俗博物館長 久留島 浩

久留島でございます。長時間にわたり、公開講演会・シンポジウムに多くの皆さまに最後までご参加いただきまして、本当にありがとうございました。主催者の一員として、一言だけご挨拶申し上げます。

私たちは、冒頭で日高教授が紹介しましたように、シーボルト父子に関する資料の調査研究という、人文機構のプロジェクトを6年間にわたって進めてまいりましたが、この講演、シンポジウムのご発言などを通して、幾つかのことを学ばせていただきました。クライナー先生からは本当にたくさんのことを学ばせていただいたのですが、欧米に残る日本関連の「もの」資料から日本文化研究を行うことの意義について、あらためて教えていただきました。先生は長年にわたって、欧米に残る日本関係資料の調査研究を推進し、常にそれを活字の目録、Web目録等で公開してこられました。先生の先駆的なお仕事なしに、私たちのこの6年間の調査研究は始まりませんでした。心からお礼申し上げたいと思います。

2番目の大場先生からは、ご専門の植物標本を中心として、シーボルトが持ち帰った標本だけではなく、持ち帰った植物そのものが与えたヨーロッパ文化への影響について、園芸だけではなく美術工芸、どちらも芸術だとお話をなさっておられました。それについてお話を頂きました。大場先生は、今日はお話をされませんでした。2006年からシーボルトコレクション国際会議を開催してこられて、シーボルトコレクションの保存と活用についても私たちをリードしてくださっていますし、ライデンにあるシーボルトハウスの今後の活用についても、一緒に常に考えてくださっている方です。そして今日は、文理融合研究のあり方についての貴重なお話も頂くことができました。

3番目の松井先生からは、対外関係史、なかんずく日蘭関係史の中でのシーボルトコレクシ



ョン形成の歴史的意義と、先生がこの調査研究の中で発見された資料に基づいて、コレクション形成の実態といえますか、その実情について貴重なお話をさせていただきました。あらためてこの貴重な講演をしていただきました。クライナー先生、大場先生、松井先生に、私からも感謝を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

最後のシンポジウムの部分が大変短くて申し訳ないと思っておりますが、その中でも「もの」資料をいかに分析するか、そして「もの」と文献とをいかに関わらせて研究を進めるか、さらに文理連携をしながら研究を進めなければいけないという点について、今回あらためて私たちは学ばせていただきました。これを踏まえて、4月からの新しい調査研究に生かしていきたいと考えています。また、7月からは先ほど日高教授からも紹介がありましたが、歴博を皮切りに1年間にわたって巡回する企画展示「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」は、この6年間の成果を展示の形で表現したものです。科博の展示もそれに併せて行われることになっています。今度は展示場で皆さまにお目に掛かることを期待して、私の最後のあいさつにさせていただきます。ありがとうございました。

(司会) これで今日の全日程を終了いたしました。皆さま、どうぞお気を付けてお帰りください。本日はご参加いただきまして、誠にありがとうございました。